

「ビューティーフル・サンデー」

作 中谷まゆみ

登場人物

三枝ちひろ (35)

戸川秋彦 (37)

小笠原浩樹 (25)

第一場

古びたアパートの一室。

正面奥に玄関に続く廊下、廊下を挟んで下手寄りにキッチンに続くアーチ、上手寄りに洗面所とバストイレに続くアーチ、上手に別室に続くドア。

上手前にベランダがあり、別室から行き来できる。下手に押し入れ、ロータイプのベッド、中央にダイニングテーブル、椅子が二脚、上手にラブチェア。壁に、ベランダから見える一軒の家を描いた絵が一枚、額に入れられて飾られている。

ある冬の朝。

午前十時頃。

テーブルに酒を飲んだあと。

ベッドに寝ている二人の人間。

一人は、戸川秋彦。

布団をもう一人に取られ、凍えるような恰好で寝ている。

もう一人は、布団を頭からかぶって寝ているため、誰なのかわからない。

秋彦、寒さを感じて目を覚ます。

アイマスクを取り、もう一人を見やる。

秋彦

「……また全部取りやがって」

と言いながら、ホツとした顔。

枕元に置いてあった眼鏡をかけ、起き上がる。

秋彦

「うゝ寒……」

ヒーターをつけ、手でバンバンと叩く。

上着を羽織り、テーブルの酒やグラスを片づける。

体をさすりながらバスルームへ行き、顔を洗う。

と、布団がもぞもぞと動き、やがて顔を出す女、三枝ちひろ。

ちひろ「……………」

ちひろ、キョトンとしている。  
寒いと思ったらキャミソール姿。  
辺りを見回すが、服は見当たらない。

ちひろ「……………?」

と、秋彦がバスルームから出てきて、ちひろはあわてて布団をかぶる。  
秋彦、ベランダへ行き、洗濯機のスタートボタンを押し、トイレへ。  
ちひろ、またおそるおそる顔を出す。  
と、固定電話が鳴り出す。

ちひろ「!」

またあわてて布団をかぶるちひろ。  
電話の音に気づいた秋彦がトイレから出てくる。  
電話に出ようとするが、出る前に切れる。

秋彦「(あ…………)」

ちひろの寝姿が変わっているのを見て言う。

秋彦「何時に帰ってきたんだ?」

返事はない。

秋彦

「また飲んでたんだろ。卒業前だからってあんまり無茶するなよ? メシ食う? あれ作ってやろうか、フレンチトースト。買ってあるんだよ、フランスパン。食べたい?」

返事はない。

秋彦「まだ怒ってんのか?」

秋彦、テーブルに座り、コンタクトレンズをつけはじめる。

秋彦 「昨日はオレが悪かったよ。うっかりなんだよ。ほんとう  
っかり。なんで忘れちゃったんだろうなあ。一週間前は  
覚えてたのに。ああ、来週だなんて思ってたんだよ。こ  
こんとこちよっと忙しかったからなあ。ごめん。この通  
り」

返事はない。

秋彦、ちひろを見る。

秋彦 「いつまで拗ねてんだよ……。いい加減にしないと……。襲  
っちゃうぞ！」

ちひろを後ろから抱きしめる秋彦。  
驚いて布団から顔を出すちひろ。

ちひろ 「あ——————っ!!」  
秋彦 「あ——————っ!!」

秋彦、愕然。

秋彦 「あ、あ、アンタ誰だ……」  
ちひろ 「……………」  
秋彦 「ここになにしてる……」  
ちひろ 「……………」  
秋彦 「なんでオレのベッドで寝てる！ いつからここにいた！  
どうやってこの部屋に入った！ 答えろ！ 答えないと  
警察呼ぶぞ！」

いきなりベッドを飛び出し、玄関へ走るちひろ。

秋彦 「待て！」

追いかける秋彦。

服を着ていないことに気づき、戻ってくるちひろ、  
脱ぎ捨ててあったコートを見つけ、走る。

秋彦も気づいて走り、コートを奪う。

秋彦 「フッフッフッフ……」  
ちひろ 「私のこと、見えるんですね」

秋彦 「……あ？」  
ちひろ 「はっきり見えます？ 後ろ、透けてません？ うわっ、透けてる！」

キヤミソールから下着が透けているのに気づき、ベツドカバーを体に巻きつける。

秋彦 「なに言ってるんだ、この女……」

ちひろ 「私、霊なんです」

秋彦 「え？」

ちひろ 「霊です。地縛霊」

秋彦 「……」

ちひろ 「昔、この部屋に住んでたんです。でもある日、風呂場で転んで地縛霊に」

秋彦 「……」

ちひろ 「ずっとここにいたんですけど、気がつきませんでした？」

秋彦 「これは警察が来るまで預かってく」  
ちひろ 「警察!？」

秋彦、ちひろのコートを押し入れに放りこみ、受話器を取る。  
ちひろ、フックを押し。

秋彦 「!」

ちひろ 「こういうこと初めて？」

秋彦 「朝起きたらとなり知らない女が寝てたなんてことがしよっちゅうあってどうする!」

ちひろ 「よかった？」

秋彦 「あっ？」

ちひろ 「したんでしょ？」

秋彦 「なにを」

ちひろ 「男と女がひとつベッドに寝てなにもないわけないじゃない」  
い

秋彦 「アホか！ オレはアンタがとなりに寝てるなんて今の今まで知らなかったんだ！ なんかあるわけないだろ!」

ちひろ 「そんなことわかんないじゃない」  
秋彦 「わかるよ!」

秋彦、電話しようとする。

ちひろ 「でも誰かと一緒に暮らしてるんでしょ？」

秋彦 「(手を止めて) なんでそのこと……!」

ちひろ 「さっき私に話しかけてたじゃない」

秋彦 「そうだった……」

ちひろ 「間違えちゃったのねー、彼女と私」

秋彦 「間違えないよ!」

ちひろ 「なんで言い切れるの?」

秋彦 「当たり前だろ! オレは、オレは、アンタみたいな女に  
手を出すほど……なんでオレはこんなこと一生懸命言い  
訳してんだ」

ちひろ 「なによ」

秋彦 「なんだよ」

ちひろ 「私みたいな女ってどんな女よ。私がどんな女か知ってる  
って言うの? そりゃセックスはしたかもしれないわよ  
?」

秋彦 「してないって言うてるだろ!」

ちひろ 「でもたかが一回や二回でしょ?」

秋彦 「二回もするか! いや、ちがう! 一回もしてない!」

ちひろ 「とにかく、一回や二回セックスしたぐらいでわかったよ  
うなこと言ってもらいたくないわね。最低でも三回はし  
なきゃ」

秋彦 「あ?」

ちひろ 「一日にじゃないわよ? 日をあらためて三回。最初の  
回は勢いだから。したいしいって思ってるときのセッ  
クスっていいも悪いもないじゃない。その日はたまたま  
セックス日和だったってだけかもしれないね。二回目  
は多少冷静になるけど、まだムードに流されるのよ。で  
も三回目はさすがに素に戻るから。セックスは素に戻っ  
てからが問題なの。ムードも勢いもなくなってるからのセ  
ックスが、本当のセックスなのよ。だから三回。三回や  
れば語ってもいいわ」

秋彦 「……………」

秋彦、受話器を取る。

ちひろ、フックを押す。

秋彦 「手を放せ」

ちひろ 「その前に服返して」

秋彦 「警察が先だ」

ちひろ 「寒いよ。コートじゃなくていいから、コートの下に着てた服返して」

秋彦 「そんなもん知るか」

ちひろ 「あなたが脱がしたんでしょ？」

秋彦 「脱がすか！」

ちひろ 「おかしいな、どこに脱いだんだろ。まさかこの恰好で来たわけじゃないよねえ……」

キャミソール姿で服を探しまわるちひろ。

秋彦 「アンタ……なにが目的なんだ」

ちひろ 「服を見つけるのが目的よ」

秋彦 「ちがうよ！ この部屋に入った目的だよ！」

ちひろ 「そんなものないわよ」

秋彦 「ないわけないだろ！ 目的もなく人の部屋に入りこむヤツがいるか！」

ちひろ 「ま、世の中にはいろんな人がいるから」

秋彦 「まとめるな！」

ちひろ 「ほんとに覚えてないの？」

秋彦 「なにを」

ちひろ 「昨日のことよ。考えてもみなさいよ。寝てる間に知らない女が勝手に部屋に入ってきて、わざわざ下着姿になって、あなたのとなりで寝ると思う？ しかも女はこんな美しい女よ？ どう考えても不自然じゃない」

秋彦 「不自然なことをおまえがしたんだろ！」

ちひろ 「あなたいくつ？」

秋彦 「えっ？」

ちひろ 「年よ。いくつ？」

秋彦 「答える必要ない」

ちひろ 「40はいつてるよね」

秋彦 「まだ37だ！」

ちひろ 「あー、危険だわ」

秋彦 「危険？」

ちひろ 「早い人は30過ぎからはじまるって言うからね」

秋彦 「なにが」

ちひろ 「アルツハイマー」

秋彦 「そんなわけねえだろ！」

ちひろ 「可能性があるって言うてるの。昨日のこと思い出せないんでしょ？」

ちひろ、また服を探しはじめる。

秋彦 「……ちよっと待て。昨日は、仕事終わって、アルボーレでメシ食って、BASEで飲んで、そのあと家帰って、寝ようとしたけど寝れなくて、また飲んで……パタパタ歩くな、パタパタ！」

ちひろ 「服がないんだもん」

秋彦 「知るかっ」

ちひろ 「風邪ひいちゃうよ」

秋彦 「うるさいな……」

秋彦、押し入れから適当な部屋着を出して投げる。

秋彦 「たしかに酔ってはいた……酔ってはいたけど……」

ちひろ 「ねえ、これしかないの？」

秋彦 「あ？」

ちひろ 「やだ、こんなの」

秋彦 「人に服借りという文句言うな！ だいたいなんで不法侵入した女に……そうだ、不法侵入だ。警察だ！」

秋彦、電話へ。

ちひろ、電話のコードを抜く。

ちひろ 「フッフッフッフ……」

秋彦 「……………」

ちひろ 「地縛霊っていうのは嘘だけど、昔ここに住んでたっていうのはほんとよ？」

秋彦、ちひろからコードを取り返そうとする。

ちひろ 「嘘だと思うんだったら管理人さんに聞いてみなさいよ！ 駅前のタバコ屋のご主人でしょ、ここの管理人さん！」

秋彦 「なんで知ってる……」

ちひろ 「だからほんとに住んでたんだってば。電話して聞いてみてよ。絶対覚えてるから、私のこと」

秋彦 「昔ここに住んでたからって、今入っていいってことにはならない」

ちひろ 「酔ってたのよ。ちよっと嫌なことあってね。気がついたらここにきてたの。捨てられなかったんだなあ、カギ。」

この部屋、気にいってたから、今の部屋のカギと一緒にキーホルダーにつけたままだったの」

秋彦 「見せろ」

ちひろ 「え？」

秋彦 「カギだよ」

ちひろ 「ああ、はいはい」

ちひろ、バッグからキーホルダーを出して渡す。

秋彦、自分の部屋のカギと比べる。

全く同じ形の二つのカギ。

秋彦 「……………」

ちひろ、秋彦が出してくれた部屋着を着ながら、

ちひろ 「私もここにベッド置いてたなあ。あっちの部屋狭いんだよねー。あっ、この時計！ なつかしい！ まだ使ってくれてるんだ」

ベッドの上あたり、普通なら壁掛け時計を掛けない位置にある時計。

ちひろ 「これ、引っ越してきたときからあったでしょ。私が置いてったの」

秋彦 「……じゃあ穴開けたのもおまえか」

時計をずらしたところに、小さな穴。

ちひろ 「あっ、そう！ そうなの！ 引っ越してきた日に、こいでベッド組み立ててて、骨組みの鉄柱ぶつちやっさ(笑)。でもまさか引っ越してきた日に穴開けちゃいましたって言うわけにもいかないじゃない。それで時計つけたの。でもこの位置、正解だったと思わない？ 結構見やすいでしょ」

秋彦 「壊れてるよ」

ちひろ 「(「ケル」)

秋彦 「じゃああっちの部屋に趣味の悪いランプシェード置いたのもおまえか」

ちひろ 「あっ、そうそう！ あれも使ってくれてるの？」

秋彦 「捨てたよ」

ちひろ 「なんだ、気にいったのに」

秋彦 「気にいってたんなら持ってけよ！」

ちひろ 「ハハハ」

秋彦 「じゃあヒーター壊したのもおまえだな？」

ちひろ 「ヒーター？ 壊れてんの？」

秋彦 「壊れてるよ。つけて一時間ぐらいしないとあつたかくな  
らないんだよ」

ちひろ 「どれ」

ヒーターを見に行くちひろ。

秋彦 「見たってわかるか」

ちひろ 「ああ、思い出した。たしかねえ、こっちの方よ」

ちひろ、ヒーターのパイプを辿るように、壁をコン  
コンと叩いていく。

秋彦 「なにしてんだよ……」

ちひろ 「あ、ここここ」

ちひろ、いきなり壁をガんと叩く。

秋彦 「おい！」

ちひろ 「これであつたかくなるはずよ」

秋彦 「うそつけ！」

ちひろ 「ほんとだってば」

秋彦、ヒーターへ。

ヒーターは、本当にあたたまりはじめていた。

秋彦 「ほんとだ……」

ちひろ 「ね？ このヒーターは、壁にパイプ通してお湯循環させ  
てるだけだから、多分ここ、つまりやすいのね」

秋彦 「……………」

秋彦、黙って椅子に座る。

ちひろ、壁に飾ってあつた絵に初めて気づく。

ちひろ 「ねえ、この絵……」

秋彦 「？」

ちひろ 「これ、あの家でしょ？ 窓から見える……」  
秋彦 「ああ、教授んちだ」  
ちひろ 「教授……？」  
秋彦 「あそのダンナが似てるんだよ、教授に」  
ちひろ 「えーっ？ 似てる？」  
秋彦 「似てるよ。そっくりだよ」  
ちひろ 「そうかなあ。そんなにカッコいいかなあ……」  
秋彦 「カッコいいか？」  
ちひろ 「カッコいいじゃない、坂本龍一」  
秋彦 「その教授じゃないよ。篠沢教授」  
ちひろ 「篠沢教授？ 誰それ」  
秋彦 「昔いただろ？ 学習院でフランス文学なんか教えてる  
タレントの」  
ちひろ 「もしかして『クイズダービー』の篠沢教授!？」  
秋彦 「ああ、それ」  
ちひろ 「篠沢教授に3000点の篠沢教授!？」  
秋彦 「そうだよ」  
ちひろ 「あの人、大学教授のくせにたいはいはずすんだよね（笑  
）。でも、いい絵だね」  
秋彦 「……………（肯定）」  
ちひろ 「あなたが描いたの？」  
秋彦 「いや……………」  
ちひろ 「彼女か。絵描く女なんだ……」  
秋彦 「……………おまえさ、用がないんだったら帰ってくんない？」  
ちひろ 「でも似てないよ」  
秋彦 「え？」  
ちひろ 「篠沢教授」  
ちひろ、バッグを持って洗面所へ。  
秋彦 「どこ行くんだよ」  
ちひろ 「トイレ」  
秋彦 「断れ！ もとはアンタんちでも今は人んちなんだから」  
ちひろ 「すいません。オシッコしたいんですけどトイレに行って  
もいいですか」  
秋彦 「……………」

ちひろ、返事を待たず、トイレへ。  
秋彦はやれやれとキッチンへ。  
ミネラルウォーターのミニボトルを飲みながら戻り  
、電話のコードをつなぐ。  
と、いきなり電話が鳴る。

秋彦 「うわ！びっくりした……（出て）はい、戸川です。あ、母さん……別に覚えてないよ。いつもこういう声だよ。さっき電話した？ ああ……なに？ 来週のことならわかってるよ。もうチケットも買ったし……島倉千代子？ なんだそれ。ちがうって。飛行機のチケットだよ。それはコンサートのチケットだろ？ 飛行機の切符もチケットって言うの。言うの、こっちは！」

ちひろ、トイレから出てくる。

秋彦 「え？ 来るってなに……えっ!? ちょっと待って、なに言っただよ！ だめだよ！ だめだって、うちは！ ちょっと待って、そこどこ！ ちょっと母さん！ もしもし!? もしもし！」

電話は切れたらしい。

秋彦、呆然。

秋彦 「やばい……」  
ちひろ 「どしたの？」  
秋彦 「やばいよ……やばい、やばい、やばい、やばい……」

イライラと部屋を歩き回る秋彦。

ちひろ 「なにがやばいのよ」  
秋彦 「いや、待て。落ち着け。落ち着いて考えろ」

秋彦、水を飲む。

ちひろ 「どしたのよ」  
秋彦 「おふくろが来るんだよっ」  
ちひろ 「いつ？」  
秋彦 「今日だよっ」  
ちひろ 「今日？ 今日のいつ来るの？」  
秋彦 「それがわからないから困ってんだよ！ でも家を出てるのに電話してこれたってことは、博多行きの電車に乗る前か、すでに博多にいるってことだ。もしかしたら、もう新幹線に乗ったかもしれない！」  
ちひろ 「新幹線なら、呼び出しできるけど？」

秋彦 「(ハツとして) それだ! …どこ! …どこに電話すりゃいいんだ!」

ちひろ 「ちょっと待って。わかるかも」

ちひろ、バッグから手帳を取り出す。

秋彦 「えらい! おまえ、許す! コーヒー飲むか?」

ちひろ 「カフェオレにして」

秋彦 「カフェオレな」

秋彦、いそいそとコーヒーマーカーを準備。

ちひろ 「実家、博多なの?」

秋彦 「いや、実家は大分」

ちひろ 「大分? 大分のどこ?」

秋彦 「別府」

ちひろ 「別府!? ほんとに!?!」

秋彦 「アンタも別府なのか!?!」

ちひろ 「ううん、松山」

秋彦 「全然ちがうじゃないか!」

ちひろ 「道後だから。温泉つながり」

秋彦 「……つなげるな」

ちひろ 「でもうち、温泉じゃなかったの。なぜかパン屋。『三枝パン』。言いにくいでしょ? おいしそうでもないし(笑)。でも田舎っていいよねえ。東京に出て来て、やっとわかった」

秋彦 「じゃあ松山に帰れ」

ちひろ 「そうだよねえ。帰ろっかなあ」

秋彦 「それよりどこだ。どこに電話すりゃいいんだ」

ちひろ 「ああ。(手帳に目を戻すが) あ、「ごめん。書いてなかった」

秋彦 「……………」

秋彦、すぐさまコーヒーマーカーを片づけ、電話帳を持ってくる。

ちひろ 「でも大分から博多って遠くない?」

秋彦 「特急で二時間」

ちひろ 「だったら新幹線じゃなくて飛行機に乗ったんじゃない?」

秋彦 「飛行機は落ちると思いこんでる」

ちひろ 「うちもうちも！ あんな大きな鉄の塊が空なんか飛ぶわけないってきかないの。私たちの親の世代ってそうだよ  
ねえ」

秋彦 「(電話帳の目次を見て) J R、J R……」

ちひろ、ソファの上にあったお見合い写真を見つ  
ける。

ニヤニヤとお見合い写真と釣書を見るちひろ。

ちひろ 「ふーん、お見合いするんだ」

秋彦 「(気づいて) 何してんだよ！ 人のモン勝手に見るなよ  
！」

秋彦、取り返そうとするが、ちひろは逃げる。

ちひろ 「26？ まだ若いじゃない」

秋彦 「返せ！」

ちひろ 「お茶の水出てんだ。そりやまずいよねえ。お茶の水出  
お嬢様とお見合いする前に他の女とやっちゃったら」

秋彦 「やってないって言ってんだろ！」

ちひろ 「でもこんなこと言っちゃなんだけど、あんまり美人じゃ  
ないね」

秋彦 「自分のこと棚にあげてよく言うな」

ちひろ 「え？ 私って、そんなに美人？」

秋彦 「……………」

ちひろ 「でも、一緒に暮らしてる彼女がいるのに、どうしてお見  
合いなんかするの？」

秋彦 「おまえには関係ない。て言うかおまえ帰れ」

ちひろ 「あっ、わかった！ 彼女のこと、お母さんに内緒にして  
るんですよ！」

秋彦 「……………」

ちひろ 「でも、お見合いも断れなくて、彼女がいるとも言えなく  
て、あなたがどっちつかずだから、それで彼女とも喧嘩  
になったんだ！ そうでしょ！」

秋彦 「うるさい！」

ちひろ 「凶星だ、凶星だ」

秋彦、ムツとして電話帳をめくる。

ちひろ 「そう言えば、帰って来ないね、彼女」

秋彦 「おまえは帰れよ……」

ちひろ 「でも今日、日曜だよ」

秋彦 「それがなんだ」

ちひろ 「日曜ぐらいのんびりしようよ」

秋彦 「自分んちでのんびりしろよ！」

ちひろ 「帰っても一人だもん」

秋彦 「知るか、そんなこと」

ちひろ 「一人って嫌だよ。昨日もね、なんであんなに酔っぱらったかって言うかね、買い物してたらどっかで携帯落としちゃって、誰か拾ってくれてないかなあとと思って携帯にかけたのね？ そしたら男の人が出て、返してくれるって言うから待ち合わせしたの。そしたら食事しないかって言うから行って、そのあと飲みに行こうって言うから行って、ホテル行こうって言うから行ったの。でもシヤワーから出てきたらいなくなってたの。ひどいと思わない？」

秋彦 「おまえ、バカか」

ちひろ 「だって、一人でいるの嫌だったんだもん……」

秋彦 「まあ、何も取られなかったんならいいけど」

ちひろ 「……え？」

秋彦 「だから、財布とか」

ちひろ 「うそ……」

秋彦 「調べてないのか？」

ちひろ、あわててバッグを調べる。

ちひろ 「ない……」

秋彦 「おいおい」

ちひろ 「どうしよう……」

秋彦 「家どこ」

ちひろ 「中目黒」

秋彦 「しょうがねえなあ……」

秋彦、押し入れを開け、財布から二千円を取り出してちひろに差し出す。

秋彦 「ほら」

ちひろ 「いいの？」

秋彦 「いいよ」

ちひろ 「やさしいんだね」

秋彦 「別に、普通だ」

ちひろ 「帰らなくちゃダメ？」

秋彦 「ダメ！ もうわかったから。アンタが悪い人じゃないのも、昨日嫌なことがあって、酔って間違えてここに来たのもわかった。だからもう帰ってくれ！」

言いながら、ちひろのコートを出そうとして、ふと手を止める。

秋彦 「……………」

やがて、怖い顔になってちひろを振り返る秋彦。

秋彦 「返せ」

ちひろ 「え？」

秋彦 「とぼけんな！ 金だよ！」

ちひろ 「え……………」

バッグにしまおうとしていた二千元。

秋彦 「その金じゃない！ ここにあった五百万だ！」

ちひろ 「五百万!？」

秋彦 「おまえが盗んだんだろ！」

ちひろ 「ないの？」

秋彦 「ないから言ってるんだ！ 返せ！」

ちひろ 「そんな大金、どうして家に置いといたのよ」

秋彦 「使うからだ！」

ちひろ 「なにに？」

秋彦 「おまえには関係ない！」

ちひろ 「どこに入れといたの？」

秋彦 「この引き出しだ！」

ちひろ 「だめじゃない、そんなとこに入れちゃ。取ってくださいって言ってるようなものじゃない」

秋彦 「誰もこんなとこに五百万も入ってると思わないだろ！」

ちひろ 「バカね。プロの泥棒って、そういうところから見るのよ

? ほんとにここに入れたの？」

秋彦 「入れたよ」

ちひろ 「間違いない？」

秋彦 「間違いない」

ちひろ 「じゃあ警察に届けた方がいいわね」

秋彦 「そうだな……てちがうよ！ オレはおまえを疑ってんだよ！」

ちひろ 「ほんとに私が取ったと思ってんの？」

秋彦 「思うよ！」

ちひろ 「取ってないってば」

秋彦 「うそつけ！」

ちひろ 「ほんとよ」

秋彦 「バッグの中身、全部出してもらおうか」

ちひろ 「勝手にすれば？」

ムツとして、バッグの中身をテーブルにばらまくちひろ。

秋彦 「ない……ない……！」

ちひろ 「取ってないんだからあるわけじゃないじゃない」

秋彦 「どこに隠した！」

ちひろ 「隠すところなんかないでしょ？ あなたもしつこいわね」

秋彦 「服脱げ」

ちひろ 「はあ!？」

秋彦 「服の中に隠してるんだろ！」

ちひろ 「そんなわけじゃないじゃない。さっきまで下着だったでしょ？」

秋彦 「だからその下だ！ わざと下着姿でうろろして、その下に隠しているわけはないと思わせようという作戦だな!？ そんな手にひっかかるか！ 全部脱いでもらおうか」

ちひろ 「そう。それが目的……」

秋彦 「おまえの裸なんか見たかないよ！ でもな、たとえ見たからってオレはなにも感じないんだ、悪いけど！」

ちひろの服を脱がせようとする秋彦。

ちひろ 「ちよっとなにするのよ！ やめてよ！ ちよっと！」

もみあうちひろと秋彦。  
と、ドアが開き、紙袋を抱えた小笠原浩樹が帰って来る。

浩樹 「ただいまー」

秋彦 「!? ヒッ、ヒロ……………」

ちひろ 「？」

浩樹 「びっくり」

秋彦 「ちっ、ちがうんだ」

浩樹 「女、連れこんでる」

秋彦 「ちがう！ ちがうんだ、これにはワケが」

浩樹 「しかも襲ってる」

秋彦 「ちがうんだって！」

浩樹 「うそつき」

秋彦 「うそじゃない！」

浩樹 「女に触るとじんましんが出るって言ってたくせに」

秋彦 「出てるよ！ めちゃくちゃ出てるよ！ 見ろよ、ほら！

じんましんだらけだよ！」

背中をめくって浩樹に見せる秋彦。

浩樹 「うわっ、ほんとだ」

ちひろ 「どこどこ？ うわっ、ほんとだ、気持ち悪い」

秋彦 「誰のせいで出たと思ってんだよ！」

浩樹 「大丈夫？」

秋彦 「かゆいよ。めちゃくちゃかゆいよ」

浩樹、秋彦の背中をかいてやったりする。

そんな二人を見ていたちひろ、合点がいったような顔で言う。

ちひろ 「あーあ、なるほどね…………」

秋彦 「……………」

ちひろ 「そっかさっか、そういうことか…………」

秋彦 「……………」

秋彦、バツ悪そうに、服を直す。

浩樹 「ところで、どちら様？」

ちひろ 「どうもはじめまして」

秋彦 「泥棒だ」

ちひろ 「ちよっとー！」

浩樹 「泥棒？」

秋彦 「オレの五百万、盗んだんだ」

ちひろ 「盗んでません」

浩樹 「五百万で、頭金の？」

秋彦 「ああ。この女が体のどこかに隠し持ってる」

ちひろ 「持ってないってば。あなたもしつこいわねえ」

浩樹、ベッドへ。

秋彦 「じゃあどこにいったんだよ、五百万は！」

ちひろ 「知らないわよ、そんなこと」

秋彦 「五百万が一人で勝手にお出かけしたって言うのか!？」

ちひろ 「したんじゃないの？」

秋彦 「するわけねえだろ！」

浩樹 「あるじゃん」

秋彦 「あ？」

浩樹 「ほら」

浩樹、枕の中から取り出した五百万の入った封筒を見せる。

秋彦 「あれっ!?! どこにあった!?!」

浩樹 「枕の中」

秋彦 「枕!? なんで!?! オレ、引き出しにしまっと思ったのに」  
「引き出したと危ないからって、あちこち入れ直して、結局、枕の中に隠したじゃん。もし泥棒が入っても、ここなら絶対大丈夫だって言って」

秋彦 「あ……そっか……。そうだ、そうだ、思い出したぞ」

浩樹 「最近、忘れっぽいよ? アルツハイマーじゃない？」

ちひろ 「やっぱリイ! やっぱりそうなんだあ!」

秋彦 「うるさい! おまえは黙ってる!」

浩樹 「秋彦っ」

秋彦 「え……?」

浩樹 「彼女のこと疑ったんだろ? なにもしてないのに泥棒扱いしたんだろ? なんか言うことあるんじゃないの?」

ちひろ 「あるんじゃないの?」

秋彦 「……………」

浩樹 「素直に謝りなよ」

ちひろ 「謝りなよ」

秋彦 「……………どうもすみませんでした……………」

ちひろ 「わかればいいのよ、わかれば」

秋彦 「なんでオレがコイツに謝んなきゃいけないんだーっ!」

ベッドで暴れる秋彦。

浩樹 「ごめんね。昔から人に謝るってことができない人です」  
ちひろ 「ああ、いるいる」

浩樹 「オレ、小笠原浩樹」  
ちひろ 「浩樹くん」

浩樹 「ヒロでいいよ。おねえさんは？」  
ちひろ 「やあね、おねえさんなんて。そんなに年変わんないですよ？」

秋彦 「変わるよ！」

浩樹 「なんて名前？」

ちひろ 「三枝ちひろ」

浩樹 「ちひろ!? オレのお母さんもちひろだよ!」

ちひろ 「うそオ! 美人!」

浩樹 「美人美人! もう死んじやったけど」

ちひろ 「美人薄命とはよく言ったもんよね……」

秋彦 「おまえも死ねーっ!」

暴れながら騒いでいる秋彦。  
と、電話が鳴る。

秋彦 「!」

浩樹 「鳴ってるよ?」

秋彦 「あ、ああ……」

秋彦、強張りながら電話に出る。

秋彦 「もしもし……ああ! 児島!? なんだよ、おまえ! さ  
っき電話切れたぞ!? えっ!? なに!? 聞こえないよ!  
」

大きな声で言いながら、秋彦は電話ごと持って別室  
へ。

怪訝に見送り、肩をすくめるちひろと浩樹。

浩樹はテーブルに座り、持ち帰った紙袋から、クラ  
ッカーや折り紙などのパーティーグッズを出す。

ちひろ 「あの絵、あなたが描いたんだってね」  
浩樹 「うん」

ちひろ 「いい絵だね」  
浩樹 「ありがとう。この部屋に住むようになって一番最初に描いた絵なんだ。この家、そこから見えるんだよ？」  
ちひろ 「知ってる。昔ここに住んでたから」  
浩樹 「うそ、ほんと!？」  
ちひろ 「昔ね」  
浩樹 「そうなんだ」  
ちひろ 「他にはないの？」  
浩樹 「うちにはあれだけ。あとは知り合いのギャラリーに置いてもらってるんだ」  
ちひろ 「ギャラリー？ じゃあ売ってるの？」  
浩樹 「一応ね」  
ちひろ 「すごいじゃない」  
浩樹 「でもまだ勉強中なんだ。独学だったから、おとしから専門学校行ってて」  
ちひろ 「えらい」  
浩樹 「えらくないよ。全部、秋彦に出してもらってるしね」  
ちひろ 「ふーん、そうなんだ……」

秋彦、戻ってくる。

秋彦 「ヒロ、出かけるぞ」  
浩樹 「え？」  
秋彦 「今日は外でお祝いしよう」  
浩樹 「やだよ」  
秋彦 「なんで」  
浩樹 「寒いじゃん」  
ちひろ 「お祝いって？」  
浩樹 「今日、記念日なんだ」  
秋彦 「言うな」

秋彦、着替えはじめる。

ちひろ 「記念日？」  
浩樹 「二人で暮らしはじめて、ちょうど三年」  
秋彦 「言うなって!」  
ちひろ 「もしかして、あなたたちの同棲記念日？」  
浩樹 「うん」  
ちひろ 「ふーん。そう……」  
秋彦 「あっ、あそこ行くか、ジンバブエ料理。おまえ、行きた

がってたよな」

浩樹 「毎年家でパーティーやるんだ」

秋彦 「……………」

ちひろ 「パーティーなんかやるんだ……………」

浩樹 「ホモって、アニバーサリー好きだから」

ちひろ 「アニバーサリー……………」

浩樹 「♪（※松任谷由実『ANNIVERSARY』を歌い出す。2フレーズ）」

秋彦 「歌うな」

ちひろ 「♪（※浩樹に続けて歌い出す。1フレーズ）」

秋彦 「おい！」

ちひろ 「♪（※構わずもう1フレーズ歌う。ここまでAメロ）」

秋彦 「おまえもう帰れよオ」

浩樹とちひろ、見つめ合って歌う。

浩樹・ちひろ 「♪（※Bメロ全部）」

ついには踊りはじめる二人。

浩樹・ちひろ 「♪（※サビ全部）」

秋彦 「……………気がすんだか？」

終わるかと思わせて、転調してサビを熱唱。

浩樹・ちひろ 「♪（※転調後のサビを1フレーズ）」

秋彦 「転調するなーっ！」

拍手などして盛り上がる浩樹とちひろ。

ちひろ 「いいよねえ、ユーミン」

浩樹 「最高だよねえ」

ちひろ 「『シャンゲリラ』行った？」

浩樹 「行った行った！ カッコよかったよねえ、ユーミン。ねっ、今回のツアー見た？ 『フローズン・ローゼズ』！」

「

ちひろ 「見てない！」

浩樹 「うそ！ ちひろ見たら死ぬよ絶対！」

ちひろ 「どんなのっ？」

浩樹 「ユーミンが、グラランドピアノ一台でいきなり歌うの。』」

ベルベット・イースター』！」

ちひろ 「カッコいい！」

浩樹 「死ぬでしょ？」

ちひろ 「死ぬ死ぬー！」

秋彦 「さ、行くぞ」

着替え終わった秋彦、浩樹を促す。

ちひろ 「でもいいなあ、アニバーサリーか……」

浩樹 「ちひろも一緒にお祝いしてよ」

秋彦 「ヒロ！」

ちひろ 「いいのっ？」

浩樹 「いいよ」

秋彦 「よくない！」

浩樹、ポケットに入れておいたパーティー用のクラッカーを、秋彦の顔の前でいきなり鳴らす。

秋彦 「!？」

浩樹 「泥棒扱いしといて、よくそんなことが言えるね。お詫びに食事でもどうですか、ぐらい言えないの？」

秋彦 「……………」

ちひろ 「言えないの？」

秋彦 「(ムカつく)」

と、ベランダの洗濯機がピー。ピーと音を立てる。

浩樹 「洗濯終わったよ？」

秋彦、ため息まじりにベランダへ行こうとする。

ちひろ 「あ……でもお祝いするのはいいけど、今日ほら、お母さん……………」

秋彦 「あ……………」

浩樹 「なに……………」

秋彦 「せ、洗濯、洗濯物干してきてくれ。すぐ干さないと、臭くなっちゃうから。な？ 干してきて」

浩樹、怪訝ながらもベランダへ。

秋彦、浩樹を見送って、ちひろに言う。

秋彦 「言うなよっ」

ちひろ 「え？」

秋彦 「おふくろのこと、ヒロには言うなっ」

ちひろ 「でも来るんでしょ？」

秋彦 「来るよっ、一時の新幹線でっ。今から博多に向かうって

電話があった」

ちひろ 「じゃあ……」

秋彦 「とにかく言うな！ て言うか、帰れ！」

そこへ、ヒロが女物の服を持って戻ってくる。

浩樹 「ねえ、なにこれ」

ちひろ 「あ！ 私の！」

秋彦 「え？」

ちひろ 「なんで洗っちゃったのよ！」

秋彦 「知らないよ。洗濯機に入ってたんだよ」

ちひろ 「あーあ、これで帰れない」

秋彦 「帰れ！ それ持って帰れ！」

ちひろ 「じゃ、言っちゃお」

秋彦 「あ——————っ！」

浩樹 「なんだよ、もう、うるさいな……」

秋彦 「……………」

浩樹 「ベランダに干しとけばそのうち乾くよ」

ちひろ 「じゃ、干してくるね」

ちひろ、ベランダへ。

秋彦 「なんで誘うんだよ、あんな女……。得体の知れない女だぞ？」

ぞ？」

浩樹 「淋しそうだから」

秋彦 「……………」

ベランダに出たちひろ、そこから見える一軒の家を  
しばし見つめる。

ちひろ 「……………」

やがて、服を干しはじめる。

部屋の浩樹、ピルケースを取り出し、薬を出す。

秋彦 「メシ食ったのか？」  
浩樹 「うん。この水もらっついていい？」  
秋彦 「ああ」

浩樹、秋彦が飲んでいた水で薬を飲む。

秋彦 「昨日はどこにいたんだ」  
浩樹 「友達んち」  
秋彦 「ちゃんと寝たのか？」  
浩樹 「うん」  
秋彦 「あんまり無茶するなよ？」  
浩樹 「してないよ」

秋彦はふと思い出し、五百万の入った封筒を持って  
うろろうろ。

浩樹 「なにしてんの？」  
秋彦 「あの女にバレた以上、もう枕には隠せないだろ」  
浩樹 「(呆れ顔)」  
秋彦 「あっ、ここにしよっ」

秋彦、ちひろが見ていないのを確認して、ゴミ箱の  
下に隠す。

秋彦 「ここなら大丈夫だろ」  
浩樹 「ちひろー！ さっきの五百万、ゴミ箱の下に隠したよー  
！」  
秋彦 「おい！」  
ちひろ 「えっ、なにになに？」

ベランダから戻ってくるちひろ。

秋彦 「来るな！ あっち行け！ て言うか、おまえ帰れ！」

暗転。

第二場

午後二時半頃。

部屋には誰もおらず、バスルームからシャワー音。そこへ、買い物袋と郵便物を持った秋彦が、走って帰ってくる。

電話も留守番電話じゃないのでかかってきたかどうかはわからないが、特に変わった様子がないことを見てホッとする。

そこへ、バスローブ姿のちひろが、缶ビールを飲みながらキッチンから出てくる。

ちひろ「あっ、おかえりー」

秋彦「なんでまた脱いである……そしてなに飲んで……」

ちひろ「お風呂入ったの。あなたも入れば？」

秋彦「誰んちだと思ってんだ……」

秋彦、郵便物を自分宛と浩樹宛にわけ。

自分宛のは電話料金やガス料金のお知らせばかり。

浩樹宛のは大きな封筒に入った書類のようなもの。

ちひろが見ていた郵便物を奪い返し、バナナなどのフルーツを買い物袋から出す。

ちひろ「わー、なんかいっぱい買ってきたねえ。ね、ね、何作っ

てくれんの？」

秋彦「ヒロの好きなビシソワーズ」

ちひろ「ふんふん」

秋彦「オレの好きなカニみそサラダ」

ちひろ「ふんふん」

秋彦「ヒロの好きなカプレーゼ、オレの好きな蛤の酒蒸し、ヒロの好きな鴨肉のロースト、オレの好きな豆ごはん。以上」

ちひろ「私の好きなコロッケは？」

秋彦「……………」

ちひろ「ま、いっか。今言ったの全部好きだから」

秋彦「暗に邪魔だと言ってるのがわからんか」

ちひろ「ハックション！ ごめん、なに？」

秋彦「……服着ろ」

ちひろ「はーい」

バスローブを脱ごうとするちひろ。

秋彦「ここで脱ぐな！ あっちで脱げ！」

ちひろ「はいはい。ごちそうサマンサ〜」

ちひろ、飲み終わったビールの缶をテーブルに置いて別室へ。

秋彦、買い物袋とビールの缶を持ってキッチンへ。

ちひろ「あ、そうだ。さっきお母さんから電話あったよ」

あわてて戻ってくる秋彦。

秋彦「いつ！」

ちひろ「だからさっき」

秋彦「誰が出たんだ」

ちひろ「私」

秋彦「ハア……（とホツとする）」

ちひろ「だってずつと鳴ってんだもん。今どき珍しいよね。留守電機能のついてない電話使ってる人」

秋彦「なんだった？」

ちひろ「だから、留守電機能の……」

秋彦「電話じゃない！ おふくろだよ！」

ちひろ「ああ、島倉千代子はいよいよって」

秋彦「そんなことじゃなくて」  
ちひろ「秋彦は電話しても、すぐ切ろうとするからつまんないって」

秋彦「そんなことでもなくて……」

ちひろ「あ、そうそう、お母さん、無事、新幹線に乗って、今広島だったって」

秋彦「それだよ、それ！」

ちひろ「七時過ぎに東京駅に着くって言うってた」

秋彦「知ってるよ。なんでいちいち電話してくるんだ……」

ちひろ「なんかねえ、新幹線できなりの座った人も、島倉千代子のコンサートに行く人だったんだって」

秋彦、どうでもいいという顔。

ちひろ 「たまには電話してあげたら？ お母さん、一人暮らしでしょ？ うちのお母さんなんて毎日のように電話してくるよ？ いつもお兄ちゃん嫁の悪口言うだけだけだね」

この会話の間に、着替えたちひろが出てくる。  
朝、秋彦が貸したのとはちがう服。

秋彦 「おまえ、どっからその服……」

ちひろ 「ヒロが貸してくれたの。秋彦の服は全部ダサイからって」

秋彦 「……………」

ちひろ 「あ、そうそう。これ、電話番号」

と、電話の脇に置いてあったメモを渡すちひろ。

ちひろ 「ここに掛けて、ひかり118号の乗客呼び出しお願いしますって言ったらつないでくれるから」

秋彦 「(意外で)あ、そう……。……………」  
ところでアンタ、自分のこと、なんて言ったんだ？」

ちひろ 「元恋人」

秋彦 「は!?!」

ちひろ 「だって、なんの関係もありませんって言うのも変だし、友人ですとか言うのと、ほんとは恋人なんじゃないかって思って、結婚の可能性とか考えちゃったら気の毒でしょ？ だから、昔つきあってたけど今は単なる友人で、今日はたまたま近くを通りかかったからちょっと寄ってみたんですって言った。安心してたよ、お母さん」

この間にちひろ、バナナを一本もいで食べる。  
最後の方のセリフがもごもご言って、秋彦はちひろを振り返る。

秋彦 「何食ってんだよ!」

ちひろ 「おなかすいちやって」

秋彦 「……………」  
「ヒロには言うなよ?」

ちひろ 「バナナ食べたこと?」

秋彦 「ちがうよ! おふくろのことだよ!」

ちひろ 「なんで言っちゃいけないの? だってお母さん来るんでしょ?」

秋彦 「だから今考えてんだよ、どうするかっ」

ちひろ 「だったらヒロに話して、今日だけ友達のふりしてもらえばいいじゃない」

秋彦 「そんなことできるかっ」

ちひろ 「なんでできないの？」

秋彦 「……あのな、もしアンタが好きな男と同棲してて、お母さんが来ることになったから今日だけ友達のふりしてくれって言われたらショック受けないか？」

ちひろ 「受ける」

秋彦 「同じことだろ？」

そこへ、上半身裸でバスタオルを肩にかけた浩樹が出てくる。

浩樹 「あー気持ちよかった」

秋彦、ちひろから離れ、クイックルワイパーで床掃除をはじめめる。

浩樹 「牛乳買ってきてくれた？」

秋彦 「ああ、冷蔵庫だ」

浩樹 「ちひろと一緒に風呂入っちゃった」

秋彦 「なにーっ!？」

浩樹 「久しぶりに見たよ、女のハダカ」

ちひろ 「私も久しぶりに見た。男のハダカ」

浩樹・ちひろ 「(笑)」

秋彦 「……………」

浩樹、キッチンへ牛乳を飲みに行く。

浩樹 「ちひろね、男いないんだって。もったいないよね。いい体してんのに」

ちひろ 「うそ、ほんと？」

浩樹 「綺麗だよ？ 体の線。オッパイはないけど」

ちひろ 「これがねえ、これだけが私の弱点なのねえ。あとは完璧なんだけどねえ」

浩樹 「(笑)」

掃除をしながら冷たい目で見ていた秋彦、ふと郵便物のことを思い出す。

秋彦 「また来てたぞ」  
浩樹 「なに？」  
秋彦 「ファンレター」  
浩樹 「ああ」  
ちひろ 「ファンレター？」

浩樹、テーブルの上の大きな封筒を開ける。  
中には、かわいい封筒に入った手紙がどっさり。

浩樹 「友達がオレの写真、ゲイのホームページに載せたんだ。そしたら手紙が送られてくるようになってさ」  
ちひろ 「メールじゃなくて？」  
浩樹 「人間、便利な生活に慣れすぎると、自分が思ってる以上のことを言ったりしたりするから嫌なんだって」

ちひろ 「なにそれ」  
浩樹 「メールを書くぐらいなら手紙を書くし、電話をするぐらいなら会いに行く。会うのがめんどくさいと思ったときは電話をする用もないってことだった」

ちひろ 「ひよっとして、それで電話も留守電じゃないの？」  
浩樹 「そうだよ。今時、携帯も持ってない」

ちひろ 「オヤジくさーい」  
秋彦 「……………」  
ちひろ 「でもすごいねえ。男の子もファンレターなんか書くんだ」

浩樹 「これ、ほとんど女の子からだよ」  
ちひろ 「女の子!? なんで!? ゲイって知ってるんでしょ？」

浩樹 「オレ、バナラ派で売ってるから」  
ちひろ 「バナラ派？」  
浩樹 「セックスレスの若いホモ。どっちもうそだけど(笑)」

ちひろ 「へーえ。じゃあ私もバナラ派で売ろっかなー」  
秋彦 「売れるかっ」

ちひろ、秋彦をにらむ。  
浩樹、手紙の一通を読み始める。

浩樹 「そうそう、さっきお風呂で聞いたんだけど、ちひろのお母さん、亀子って言うんだって」

秋彦 「!」  
浩樹 「おかしくない？」

秋彦 「お、おかしいな、おかしいおかしい」  
ちひろ 「あなたのお母さんは、なんて名前？」

秋彦 「!？」

浩樹 「瑠璃子だよ」

ちひろ 「瑠璃子……綺麗な名前じゃない」

秋彦 「綺麗じゃないよ。60過ぎて何が瑠璃子だよ」

浩樹 「それはしょうがないじゃん。80過ぎたって、瑠璃子は瑠璃子だよ」

ちひろ 「そりゃそうだね（笑）」

秋彦、ちひろの足をクイックルワイパーでコツン。

ちひろ 「イタッ」

秋彦 「ああ、当たった？」

ちひろ 「なんで掃除なんかしてんのよ」

秋彦 「汚れてるから。汚れてるなあ。アンタのまわりが一番汚れてる」

ちひろ 「失礼ね……」

ちひろのまわりを掃除しながら言う秋彦。

秋彦 「（小声で）話変えろよっ」

ちひろ 「え？」

秋彦 「（小声で）話変えろって!」

ちひろ 「ああ……でもほんとに立たないんだね」

浩樹 「え？」

ちひろ 「だから、女の裸見ても」

秋彦 「（コケる）」

浩樹 「ああ。そりゃそうだよ。ホモだもん」

浩樹は読み終わった手紙を封筒にしまう。

ちひろ 「ねえ、聞いてもいい？」

浩樹 「いいよ」

ちひろ 「いつ、自分がそうだって気づいたの？」

浩樹 「いつかなあ。はっきり自覚したのは中学のときかな。中学んとき、オレ、サッカーやってたんだけど、放課後練習してたら、いきなりすごい雨が降ってきてさ、そんなとき一番仲よかった友達で、江崎ってヤツがいたんだけど、雨に濡れたTシャツ肌に張りつけたままボール追って

る江崎見てたら、なんかすげえいやらしい気持ちになっ  
てきちゃってき、こんなこと考えちゃいけないって思え  
ば思うほど、どんどんいやらしい妄想膨らんでって、こ  
りゃホンモノだなと思ったの」

ちひろ 「(ふーん)」

浩樹 「ま、物心ついたときから男の方が好きだったけどね」

ちひろ 「じゃあ生まれつきなんだ」

浩樹 「オレはね。でも、そうじゃない人もいるよ？ 育った環  
境によってゲイになった人とか、本当はゲイなんだけど  
気づいてない人とか、本当はゲイじゃないんだけど、ホ  
モのふりしてる人とか」

ちひろ 「そんな人いるの？」

浩樹 「いるよ。ねえ(と秋彦にふる)」

秋彦 「いい加減、服着ろよ。風邪引くぞ」

秋彦、クイックルワイパーを持ってキッチンへ。

浩樹 「……………」

浩樹、見送って、別室へ。

ちひろ 「はーあ。世の中の男がみんなゲイならいいのに」

浩樹 「なんで？」

ちひろ 「男といると疲れるもん。でも今は全然疲れてないの」

浩樹 「それはゲイだからじゃなくて、好きな男じゃないからじ  
やない？」

ちひろ 「好きな男という疲れてたら意味ないじゃない」

浩樹 「意味ないね」

ちひろ 「だから私は結婚できないのか……」

秋彦、戻ってきて、家計簿をつけはじめ。

浩樹、服を着ながら出てくる。

浩樹 「ちひろ、結婚したいの？」

ちひろ 「そりゃしたいよ。もういい年だもん。この先ずっと一人  
かもしれないって思うと気が狂いそうになるのよ。女は  
30過ぎると、毎日、恐怖体験するしね」

浩樹 「恐怖体験？」

ちひろ 「そうよ。肌なんか日に日に老化してって、今の時期なん  
か顔なでると音するんだから、ガサガサって。皺も増え

るし、脂肪も増えるし、子宮癌の検査や乳癌の検査は怖いし、生理は終わっちゃったし」

秋彦・浩樹「!?!」

ちひろ「このまま年とって、そのうち病気になって、一人で孤独に死んでくのかと思うと、ほんとにゾツとする。もう誰でもいいからそばにいてほしいって感じ」

浩樹「人はいつか死ぬよ」

秋彦「……………」

ちひろ「そりゃそうだけど、一人じゃ淋しいじゃない」

浩樹「じゃあオレ、結婚してあげようか？」

ちひろ「ゲイじゃない」

浩樹「ゲイと結婚しちゃいけないって法律はないよ？」

ちひろ「そっか。アレどうすんの？」

秋彦を見やるちひろ。

秋彦、黙々と家計簿をつけている。

浩樹「男同士は結婚できないもん」

ちひろ「そんなことないよ。フランスは同性愛カップルの結婚、認めたっていうし、日本もそのうち認められるかもよ？」

「

浩樹「日本は無理だよ。それに秋彦は来週お見合いするんだ」

ちひろ「あっ、そうだ。見たよ、お見合い写真」

浩樹「あっ、見た？ お茶の水のブス」

秋彦「ブスとか言うな」

浩樹「ブスはブスだよ。ブスの人に、性格がよさそうとか言う方が失礼だと思わない？」

ちひろ「そりゃそうね。自分がブスかどうかなんで、小学生のうに気づくもんね、普通」

秋彦「アンタはいつ気づいた？」

ちひろ「自分が美人だってこと？ そうねえ。やっぱり小学生のときかな」

秋彦「……………」

浩樹「そうだ！ 見合いの練習しない!?!」

秋彦「え？」

浩樹「ちひろに相手してもらって練習しとこうよ」

秋彦「いいよ、練習なんか。それより料理しないと」

浩樹「まだいいよ。相手はブスとは言え、瑠璃子がいつも世話になってる人のお嬢さんなんだから？」

秋彦「瑠璃子はやめろ。ブスもやめろ」

浩樹 「お父さんが亡くなったときもずいぶん世話になったって  
言ってたじゃん。練習しとこうよ。せっかくちひろがい  
るんだし、こんな機会二度とないよ？ いいよね、ちひ  
ろ」

ちひろ 「それはいいけど……なんでお見合いなんかするの？」  
秋彦 「……………」

浩樹 「お母さん安心させるためだよ。秋彦のお母さん、大分で  
一人暮らししてるんだ。お父さん亡くなってずいぶん経  
つし、秋彦が帰ってきて結婚するの楽しみに待ってるん  
だ。だから、一度ちゃんとお見合いして、お母さん、安  
心させてあげようってことになったんだよ」

ちひろ 「それ、ちょっとまずくない？」

浩樹 「なんで？」

ちひろ 「だって、結婚する気ないんでしょ？ いくらお母さん安  
心させるためだからって、結婚する気もないのにお見合  
いしちゃ相手の人に失礼よ。どんなブスでも」

秋彦 「おい」

浩樹 「もちろん、やるからには本気でやるんだよ」

秋彦・ちひろ 「え？」

ちひろ 「だって、彼は……………」  
浩樹 「ゲイの中にもいるんだよ。いずれは結婚したいと思っ  
てる人」

ちひろ 「そうなの？」

浩樹 「一生ゲイで生き続けるのって結構しんどくてさ、途中で  
リタイアする人も多いんだ。田舎なんか帰ったらもつと  
しんどいよ」

ちひろ 「田舎、帰るの？」

浩樹 「大分に家建てるんだよね。さっきの五百万はその頭金な  
んだ」

秋彦 「家は建てるけど、帰るのはまだ先の話だよ……………」

浩樹 「でもいずれは帰るんだろ？ だったら結婚ぐらいしてな  
いと年とってからつらいよ？」

秋彦 「……………」

ちひろ 「ヒロくん、いいの？」

浩樹 「え？」

ちひろ 「彼が田舎に帰っちゃっても平気なの？」

秋彦 「おまえはよけいなこと……………」

浩樹 「オレはまだ若いから先のことはわかんない」

秋彦 「……………」

浩樹 「でも秋彦はもう若くないし、そろそろ先のこと真剣に考

えないとね。いつまでもオレがそばにいたいと思ってもら  
っちゃ困るよ？ オレ、はっきし言ってるから」

浩樹はそう言ってる、ファンレターの入った封筒を持  
って別室へ。

秋彦 「……………」

ちひろ 「……………あなたたち、どうなってるの？」

秋彦 「なにが」

ちひろ 「あなたはお母さん来ること隠してるし、ヒロくんは見合  
いして結婚しろって言ってるし、ゲイのカップルってみ  
んなこうなの？」

秋彦 「うるさいな。いろいろあるんだよ」

椅子を持って戻ってくる浩樹。

浩樹 「じゃあ二人とも座って！ はい、座って座って」

浩樹、秋彦とちひろを向かい合わせに座らせ、自分  
は真ん中に立つ。

浩樹 「オレは、お見合いのとき司会進行するおばさんね」

ちひろ 「仲介人て言うのよ」

浩樹 「仲介人か。えーそれでは、ただいまより、戸川秋彦さん  
と三枝ちひろさんのお見合いをはじめさせていただきます  
と思います。私、仲介人を務めさせていただきます、  
小笠原浩樹です。どうぞよろしくお願いします。ではま  
ず、簡単に自己紹介からしていただきましょうか。秋彦  
さん、お願いします」

秋彦 「……………戸川秋彦。37才」

ちひろ 「だめだめ。お見合いの席でそんなやる気のない自己紹介  
してどうするのよ。ちゃんと背筋伸ばして。もっと覇気  
のある声で。『戸川秋彦と申します！ 37才です！ ど  
うぞよろしくお願いします！』って言わなきゃ」

浩樹 「なるほど。はい、やり直し」

秋彦 「……………戸川秋彦と申します！ 37才です！ どうぞよろし  
くお願いします！」

ちひろ 「三枝ちひろと申します。26才です」

秋彦 「うそつけ！」

ちひろ 「ほんとにお見合いする人の年を言ったんじゃない。その

方が感じ出るでしょ?」

秋彦 「年だけほんとも意味ないんだよ」

浩樹 「たしかに意味ないね。はい、やり直し」

ちひろ 「ではあらためまして……三枝ちひろと申します。30才です」

秋彦 「ちがうだろ」

ちひろ 「32才です」

秋彦 「それもちがう」

ちひろ 「33才です」

秋彦 「まだ言うか」

ちひろ 「……35才です」

秋彦 「ま、そんなとこだな」

ちひろ 「(ムツとしつつ) どうぞよろしくお願いします」

浩樹 「えー、それでは……」

ちひろ 「職業がまだね」

浩樹 「あ、そっか。秋彦さん、お仕事は?」

秋彦 「デニーズ荻窪店で店長してます」

ちひろ 「うそオ! 私、行ったことある! あの近くに友達が住んで、よくあそこで待ち合わせしたもん! てことは私たち、もう会ってたんだ」

浩樹 「運命だね」

秋彦 「どこがじゃ」

ちひろ 「運命って信じるタチですか?」

秋彦 「いいえ、逆らうタチです」

ちひろ 「つまんないの」

秋彦 「早く言えよ、仕事」

ちひろ 「区役所に勤めております」

秋彦 「区役所? アンタ、公務員か」

ちひろ 「はい」

秋彦 「どうりで……」

ちひろ 「は?」

秋彦 「公務員ほど、社会性を欠いた仕事も他にないからな。アンタが変人なのもうなずけるよ」

ちひろ 「仲介人さん、この人、失礼です」

浩樹 「秋彦さん、ちひろさんはあなたのお嫁さんになるかもしれない人ですから、失礼のないように」

秋彦 「区役所の何係ですか?」

ちひろ 「戸籍係です」

秋彦 「戸籍か! じゃあ毎日幸せそうなカップルが婚姻届持つてくんの見てるわけだ。そりゃ結婚したくもなるよなあ

(笑)

ちひろ 「仲介人さん！ この人、絶対失礼です！」

浩樹、秋彦を叩く。

秋彦 「イテ！」

浩樹 「これでよろしいでしょうか」

ちひろ 「結構です」

浩樹 「えー、それでは……」

ちひろ 「あーもう、まどろっこしい。ちょっとこっち座って」  
ん

浩樹 「え？」

ちひろ 「いいから」

ちひろ、浩樹と席を代わる。

ちひろ 「それでは、お二人の人となりについてお聞きしてまいりたいと思います。まずは浩樹さん」

浩樹 「はい」

ちひろ 「ご自分の性格をひと言で言うと、どういう性格ですか？」

浩樹 「ペガサスです」

ちひろ 「動物占いじゃなくて、形容詞で言ってください」

浩樹 「あっさりしてます。細かいことにはこだわらないし、わりと前向き」

ちひろ 「短所も教えてください」

浩樹 「短所は、いい加減、気分屋、自己中……言いだしたらキリがありません」

ちひろ 「浩樹さんは正直で朗らかなお人柄とお見受けしました。では秋彦さん。秋彦さんはご自分の性格をどのようにお考えですか？」

秋彦 「几帳面です」

ちひろ 「なるほど。では、長所は？」

秋彦 「長所だよ！」

ちひろ 「失礼しました。では、短所は？」

秋彦 「短気なところ」

ちひろ 「なるほど」

浩樹 「あと、足がくさいです」

秋彦 「それ性格か！」

ちひろ 「どのような匂いですか？」

秋彦 「聞くなよ！」  
浩樹 「よく納豆が腐ったような匂いって言いますけど、納豆は  
もともと腐ってますよね」  
ちひろ 「私、大好きです、納豆」  
秋彦 「嗅いでみます？」  
ちひろ 「それでは次の質問にまいります」  
秋彦 「流すな！」  
ちひろ 「っていう風にやるのよ」  
浩樹 「OK(笑)」

浩樹、ちひろと席を代わる。

浩樹 「それではちひろさん。ご自分の性格をひと言で言つと？」  
ちひろ 「美人？」  
秋彦・浩樹 「……………」  
浩樹 「では何かお聞きしたいことがあれば、ご自由にどうぞ」  
ちひろ 「お休みの日はなにを」  
浩樹 「いいですねえ、定番ですねえ。秋彦さん、お休みの日は  
なにを？」  
秋彦 「掃除と洗濯です」  
ちひろ 「ご趣味は？」  
秋彦 「掃除と洗濯です」  
ちひろ 「もう、真面目にやっつてよ」  
秋彦 「真面目にやっつてるよ」  
ちひろ 「ほんとに掃除と洗濯が趣味なの？」  
秋彦 「そうだよ。今日もやっつただろ？」  
ちひろ 「つまらない人」  
秋彦 「仲介人さん、この人も失礼です」  
浩樹 「ちひろさん」  
ちひろ 「すいませんでした」  
浩樹 「では秋彦さん、質問をどうぞ」  
秋彦 「お休みの日はなにを」  
ちひろ 「そうですね。買い物をしたり、映画を見たり、本を読ん  
だり」  
秋彦 「知らない男の家に上がりこんだり」  
ちひろ 「そういうこともたまには」  
秋彦 「するな！」  
ちひろ 「いいじゃない」  
浩樹 「続けてください」

秋彦 「ご趣味は」

ちひろ 「恋、かな……」

秋彦 「ハッ！」

ちひろ 「仲介人さん！」

秋彦 「じゃあ聞かせてくださいよ、経験談。趣味っていうぐら  
いだから、さぞかし経験も豊富なんですよ？ これはつ  
ていうめくるめく恋の話、お聞きしたいですねえ」

ちひろ 「いいわよ？（咳払いし）私の人生で一番心に残っている  
恋は、小学校時代の恋です」

秋彦 「ほう」

浩樹 「はーい」

ちひろ 「私は小学校時代、父の仕事の関係でイギリスに住んでい  
ました」

浩樹 「イギリス？」

ちひろ 「そこで私は、ダニエルと出会いました」

秋彦 「……なに？」

ちひろ 「私とダニエルはよく学校をさぼって、海に行きました。  
ある日そのことが先生に見つかってしまいました。する  
とダニエルが言ったのです。『ボクたちは結婚します！』  
ですが大人たちは、私たちの幼すぎる恋を理解しては  
くれませんでした。だから私たちは子供たちだけの結婚  
式を挙げ、トロッコに乗って逃げたのです」

浩樹 「なんか聞いたことあるな、その話……」

秋彦 「『小さな恋のメロディー』だよ」

浩樹 「なんだっけ、それ」

秋彦 「だいたい、おまえんちは『三枝パン』だろ。なんでパン  
屋の親父が仕事の関係でイギリス行くんだよ！」

ちひろ 「本当は、高校時代の恋が忘れられませんが。私は私立の女  
子校で寮生活をしていました。ある夏休み、私が実家に  
帰ると、地元の大学に通っている彼が、うちのパン屋で  
アルバイトをしていたのです。私たちはすぐに引かれ合  
い、結婚の約束までしました。ところが、彼は私と出会  
う前に、私の母、亀子と関係を持ってしまっていたので  
す」

浩樹 「うそ！」

ちひろ 「それを知った私は傷ついて彼と別れ、別の人と結婚する  
ことになりました。ところが結婚式のと、彼が式場に  
現れたのです！」

秋彦 「うそつけ！ それは『卒業』だ！ そしておまえは映画  
の見すぎだ！」

浩樹 「なんだ、映画か」

ちひろ 「本当は、区役所に勤めはじめてからの恋です」

秋彦 「もういいよ」

ちひろ 「彼とは駅前の本屋で知り合いました。年は少し離れていますが、お互い、一目惚れでした」

秋彦 「今度は『恋におちて』か？」

浩樹 「ああ、それ見た」

ちひろ 「家が近かったこともあり、私たちは急速に親しくなりました。でも彼には、妻も子供もいたのです。そのことを彼から聞いたとき、私はショックでした。でも彼から離れることはできませんでした。私はアパートを引っ越し、彼が来るのを待ちました。彼は今までに出会ったことのないぐらい、素敵な人でした。一日のうちのほんの数時間でも彼に会えると、それだけで自分が綺麗になるような気がしました。彼に会うこと。私はそれだけしか望みませんでした。他にはなにもいらぬ。ただ永遠に、会い続けることだけを望んだのです。……でもある日、彼の奥さんが病気になるりました。重い病気で、入院生活を余儀なくされました。彼は苦しみました。私も苦しみました。やがて彼は泣きながら、私に別れを告げました……。ただ、どうしても忘れられないのです。『星でも降って来ない限り、キミとは別れない』……。いつだったか彼が言ったその言葉が、今も私の耳に残って、離れないのです」

秋彦 「……………」

浩樹 「……………」

ちひろ 「なんちって」

間。

浩樹 「ちひろさあ、ハーレクインロマンスの読みすぎじゃない？」

ちひろ 「未亡人と牛飼いシリーズがいいのよねえ」

浩樹 「なんだよそれーっ（笑）」

浩樹、ゲラゲラ笑う。

ちひろは笑いながらも、どこか遠い目。

秋彦、ちひろを見ている。

と、遠くから石焼きいも屋の音楽が流れてくる。

ちひろ 「あ、焼きいも屋さんだ」

浩樹 「焼きいも好き？」

ちひろ 「大好き！」

浩樹 「じゃあ買ってきてあげる！」

浩樹、別室に走り、財布の中身を確認しながら出てくる。

浩樹 「あつない！ 秋彦、千円！ 一万しかない！」

秋彦 「これからメシ作るのに、焼きいもなんか食うことないだろ？」

言いながら、財布を開ける秋彦。

浩樹 「いいから早く！（トラックが）行っちゃうよ！ じゃ、

ちよっど行ってくるね！ 二人で続きやってて！」

秋彦 「おい！ 上着は！」

聞かずに飛び出して行く浩樹。

ちひろ 「いい子だね……。どこで知り合ったの？」

秋彦 「道端」

ちひろ 「道端？ ナンパしたの？」

秋彦 「ちがうよ。アイツ、オレと会う前は道端でアクセサリーとかTシャツとか売るバイトしてたんだ。一緒に自分で描いた絵も並べてて、その中の一枚をオレが買ったのがきっかけ」

ちひろ 「へーえ。ヒロのどこが好き？」

秋彦 「……いいだろ、別に」

ちひろ 「照れちゃって。じゃあ好きな女性のタイプは？」

秋彦 「？」

ちひろ 「お見合いの続き」

秋彦 「もういいよ」

ちひろ 「いいじゃない、どうせヒマなんだから」

秋彦 「オレはヒマじゃない」

秋彦、ベランダに出て、洗濯物を取りこむ。  
ちひろもついて行く。

ちひろ 「ねえ、好きな女性のタイプは？ これ絶対聞かれるよ？」

秋彦 「ひかえめな人。上品で綺麗好きでしゃばらない。一歩ひいて男をたてながらも、芯は強く、賢い女性」

ちひろ、秋彦をつついて、自分を指さす。

秋彦 「……………」

ちひろ、自分の服をハンガーから取る。

秋彦 「アンタは？」

ちひろ 「え？」

秋彦 「好きな男のタイプ」

ちひろ 「タイプはありません。私を愛してくれる人だったらどんなたでも」

秋彦 「愛してくれる人ねえ……………」

ちひろ 「なによ。私を愛してくれる男なんかいないって言いたいなの？」

秋彦 「そこまでは言っていないよ。いたんだろ？ 星でも降って来ない限り、別れないって言ってくれたヤツが」

ちひろ 「……………」

秋彦、洗濯物を持って部屋へ。

残ったちひろ、しばしばーっと下を眺める。

ちひろ 「……………」

と、部屋で電話が鳴り出す。

秋彦 「(出て) はい。えっ!? もう着いたの!？」

ちひろ、ベランダから戻ってくる。

秋彦 「岡山？ じゃあ電話してくんなよ……………なに。えっ？ 知らないよ、そんなこと。調べてって、ちよっと待て！  
もうかけるな！ おい!!」

電話は切れたらしく、秋彦はぐったり。

ちひろ 「お母さん？」

秋彦 「『東京だヨおっ母さん』の二番の頭の歌詞、ド忘れしたから調べろって……」

ちひろ 「『東京だヨおっ母さん』……」

秋彦 「ヒロがいないうちになんとかしなきゃ……。なあ、知らないか」

ちひろ 「(歌いだして) ♪(※頭の2フレーズ)」

秋彦 「知ってるよ……(感激)」

ちひろ 「♪(※次の2フレーズ)」

秋彦、手拍子などして盛り上げる。

ちひろ 「♪(※Bメロ全部)」

ちひろ・秋彦 「♪(※サビを歌い切る)」

二人で間奏を口ずさみ、盛り上がるが、二番の歌い出しで止まるちひろ。

ちひろ 「……あれ？ なんだったけ」

秋彦 「(コケる)」

ちひろ 「私までド忘れしちゃった(笑)」

秋彦 「頼むよ。思い出してくれよ。あっちが電話してくる前に電話したいんだよ」

二人、また間奏を口ずさみ、思い出そうとするが、思い出せない。

やがて、ふと思いつくちひろ。

ちひろ 「ねえ、抜いちゃえば？」

秋彦 「え？」

ちひろ 「コード。とりあえず抜いといいて、思い出した時点で電話してあげれば？」

秋彦 「……天才！ おまえ天才！ そうだよ、最初からそうすればよかったんだ！(コードを抜き) これでもうビクビクしなくていいんだ……あーうれしい……涙出てきた……」

ちひろ 「私は言った方がいいと思うけどな」

秋彦 「え？」

ちひろ 「ヒロのこと。お母さんに」

秋彦 「……」

ちひろ 「そりゃね、最初はびっくりすると思う。時間もかかると

思うし、もしかしたら、いつまでたっても理解はしてもらえないかもしれない……。でも、息子が幸せだって聞いて、悲しむ親はいないと思うよ?」

秋彦 「……………」

ちひろ、壁に飾られた教授の家の絵を見て言う。

ちひろ 「この絵じゃないよね」

秋彦 「？」

ちひろ 「あなたが買ったヒロの絵」

秋彦 「ちがうよ」

ちひろ 「どんな絵？」

秋彦 「……ただの肖像画だ」

ちひろ 「人物も書くんだ」

秋彦 「ああ」

ちひろ 「あなたもモデルになってあげたりしてるの？」

秋彦 「オレの絵は描かない」

ちひろ 「え？ なんで？」

秋彦 「さあね」

ちひろ 「(小さく吹き出す)」

秋彦 「なんだよ」

ちひろ 「ううん。見せてよ、絵。あるんでしょ？」

秋彦 「あるけど……」

ちひろ 「見たら、歌思い出すかも」

秋彦 「そんなわけないだろ？」

ちひろ 「いいから見せて」

秋彦、押し入れから、キャンバスがたくさん入ったダンボールを出してくる。

ちひろ 「それ、全部ヒロの絵？」

秋彦 「ああ」

ちひろ 「全部ギャラリーに置いてあるんじゃないかなかったんだ」

秋彦 「引き取ってくれて言われたんだ」

ちひろ 「え？」

秋彦 「売れないんだよ、全然。売れない絵を置いておくほど、ギャラリーは広くもないし、儲かってもない。だからオレが引き取ってきた。ヒロには言わないでくれ。アイツには売れたって言うてあるから。ああ、これこれ」

と、一枚の肖像画を渡そうとする秋彦。

ちひろ 「……なんでそんな嘘言うの？」

秋彦 「え？」

ちひろ 「そんなことして何になるの？ そんなことしてヒロが喜ぶと思う？」

秋彦 「……………」

ちひろ 「現実から目をそらしたってしょうがないじゃない。本当にヒロが大事なら、真実を教えてあげべきよ。その上でどうすればいいのか一緒に考えてあげればいいじゃない」

秋彦 「現実ってなんだよ」

ちひろ 「……………」

秋彦 「真実ってなんだよ。オレにはそんなもん何の価値もないね。オレはヒロが傷つかなきゃいいんだ。夢を捨てなきゃそれでいいんだ」

ちひろ 「そんなのヘンだよ……そんなのやさしさじゃない」

秋彦 「……………」

ちひろ 「お母さんのことだってそうだよ。お母さん来るから友達のふりしてくれって言われるのもシヨックかもしれないけど、内緒にされてる方がシヨックなんじゃないの？」

秋彦 「じゃあアンタは現実見てるって言うのか……………」

ちひろ 「え……………」

秋彦 「妻帯者ときあって、相手のいいところだけ見て、相手が家庭持つてること目つぶってんじゃないのか！ アンタこそ現実から目をそらせてんじゃないのか！」

ちひろ 「……………」

と、ドアの開く音。

秋彦、あわててダンボールを押し入れにしまう。

そこへ、ビニール袋を持った浩樹が帰ってくる。

浩樹 「ただいまー！」

ちひろ 「あ……おかえり！」

浩樹 「ちひろ、イチゴ好き？」

ちひろ 「イチゴ？ 好きだけど」

浩樹 「よかった。じゃあ食べよ？ 秋彦これ」

浩樹、千円を秋彦に返し、別室へ行きながら話す。

秋彦 「焼きいもは？」

浩樹 「それがひどいんだ。トラックまで行ったらちょうど教授の奥さんが来てさ」

ちひろ 「!？」

浩樹 「オレも奥さんも三本ずつほしかつたのに、やきいも屋のオヤジったら、あと三本しかないって言うんだよ。しょうがないから一本半ずつ分けようかって言ってたんだけど、教授んちってほら、子供二人いるじゃない。だから三本とも譲ってあげたの。そしたらね、代わりにイチゴ持ってけて。昨日から家族で伊豆行ってたんだって。あっちの方に別荘あるとか言ってたもんね」

呆然としたままつぶやくちひろ。

ちひろ 「……病気じゃなかったんだ……」

秋彦 「……………」

浩樹 「せっかくだから食べようよ。ちひろも食べるよね」

ちひろ、低く笑い出す。

浩樹 「ちひろ？」

ちひろ 「ごめん(笑)。食べたんだけど、実はさっきおなかこ

わしちゃって、今<sup>ピ</sup>ピー<sup>ピ</sup>なの」

浩樹 「<sup>ピ</sup>ピー<sup>ピ</sup>? 大丈夫？」

ちひろ 「大丈夫大丈夫。気にしないで食べて(笑)」

言いながら笑っているちひろ。

ちひろ 「ごめんごめん、なんでもないので。あーおかし。笑ったらまたおなか痛くなってきちゃった。<sup>ピ</sup>ピー<sup>ピ</sup>だ、<sup>ピ</sup>ピー<sup>ピ</sup>——(笑)」

ちひろ、おなかを押さえてゲラゲラ笑いながらトイレへ。

秋彦 「……………」

浩樹 「……どうしちゃったの？」

秋彦 「<sup>ピ</sup>ピー<sup>ピ</sup>なんだろう? これ(イチゴ)、明日にしないか?」

浩樹 「……そうだね。じゃあ、冷蔵庫入れてくる」

浩樹、イチゴを持ってキッチンへ。  
秋彦も行きかけて、ふと窓に立つ。

秋彦 「……………」

やがて、バスルームから戻ってくるちひろ。  
秋彦、チラッと見てキッチンへ行こうとする。

ちひろ 「思い出したよ」

秋彦 「え？」

ちひろ 「♪(※『東京だヨおっ母さん』2番の頭4フレーズを手拍子しながら歌って黙る)」

秋彦 「……………」

ちひろ 「現実には、厳しいね……………」

秋彦、キッチンへ。

ちひろ 「……………」

キッチンから戻った浩樹、銀の折り紙と、ハサミを  
二つ用意。

浩樹 「ちひろ、飾り作んの手伝ってよ」

ちひろ 「あ……………うん！」

浩樹 「これをこういうふうに切ってくれる？ 切ったらここに  
入れて」

ちひろと浩樹、テーブルに座り、銀の折り紙を小さ  
く切りはじめる。

ちひろ 「彼は？」

浩樹 「料理してる」

ちひろ 「料理できるの？」

浩樹 「うまいよ」

ちひろ 「ファミレスの店長なの？」

浩樹 「関係ないでしょ」

ちひろ 「関係ないね(苦笑)」

浩樹 「秋彦ほんとはね、医学部の学生だったんだ」

ちひろ 「医学部？ 医者になるつもりだったの？」

浩樹 「うん。でも一年のとき、お父さん亡くなってね。学費払えなくなつて中退したんだって」

ちひろ 「そう……」

浩樹 「ファミレスで一生働く気なんかなかったと思うけど、真面目だからどんどん上行つちやつて、店長になつてから今の店、もう十軒目。新しくできた店に店長として派遣されて、店が軌道に乗つたらまた次、また次つて」

ちひろ 「ふーん……」

浩樹 「真面目なんだ。やたら人いいし……絵のことだつてそうだよ。この襖は開けるなつて言つたら、オレは開けないつて信じてる。秋彦つてそういうヤツなんだ」

ちひろ 「……………」

浩樹 「ああ、絵のことつていうのはね」

ちひろ 「聞いた……さっき」

浩樹 「ちひろに話したんだ、秋彦」

ちひろ 「うん……」

浩樹 「ふーん。そっかあ」

浩樹、意外だが、同時に嬉しい。

浩樹 「秋彦つて、あんまり笑わないでしょ」

ちひろ 「うん」

浩樹 「でも確実に笑わず方法がーコだけあるんだ」

ちひろ 「なに？」

浩樹 「耳に息吹きかけんの。あとでやってみ。すっごい笑うから。イテ！」

ハサミで手を切つてしまふ浩樹。

ちひろ 「大丈夫？」

浩樹 「うん。秋彦ごめん！ 絆創膏取つてー」

秋彦、やつてくる。

秋彦 「どした」

浩樹 「大丈夫。ちよつとハサミで切つただけ」

秋彦、キッチンへ。

ちひろ 「見せて」

浩樹 「あ、動かないで。ハサミも触っちゃダメだよ」  
ちひろ 「え？」

浩樹 「オレ、エイズだから」

ちひろ 「ちよっとやだ(笑)」

浩樹 「ほんとほんと。ほんとにHIVに感染してんの」  
ちひろ 「！」

救急箱を持って出てきた秋彦、ティッシュを浩樹に渡し、救急箱から消毒液を出す。

秋彦 「ヒロ、指」

秋彦、消毒液を浩樹の指に吹きつけ、絆創膏を貼ってやる。

浩樹 「サンキュ。(ちひろに)三年前にわかったんだけど、今はまだ何ともないんだ。毎日薬飲んで、月一回病院で検査してるけど、発病さえしなきゃ、普通の人と同じ生活できるんだよ？ 一緒にお風呂入ったけど大丈夫だから。ただ血はね」

ちひろ 「……………」

浩樹 「びっくりさせてごめんね。初めてだよ。秋彦以外の人間に言ったの」

浩樹、キッチンへ。

ちひろ、涙をこぼす。

秋彦 「泣くなよ」

ちひろ 「だって……………」

秋彦 「アンタにも悩みぐらいあるだろ？ ヒロの場合はそれがたまたま病気だったってだけだ」

ちひろ 「私の悩みなんか……………」

秋彦 「悩みに大きいも小さいもないよ」

秋彦、救急箱を持ってキッチンへ。

ちひろ 「……………」

暗転。

第三場

午後6時半頃。  
誰もいない薄暗い部屋。  
完成したくす玉を持った浩樹が別室から出てくる。  
くす玉を見て、どこか思いつめた表情。

浩樹 「……………」

そこへ、エプロン姿の秋彦が出てきて、電気をつける。

秋彦 「そろそろはじめるぞ」

テーブルに、銀の折り紙でいっぱいになった瓶。

秋彦 「これ」

浩樹 「わー、こんなに切ってくれたんだ」

秋彦、テーブルクロスをテーブルにかけはじめる。  
浩樹も手伝う。

浩樹 「ねえ、ちひろは？」

秋彦 「さあ。トイレじゃないのか？」

浩樹、バスルームのドアをノックする。

浩樹 「ちひろ？」

ドアを開けるが、誰もいない。

浩樹 「いないよ。どこ行っちゃったんだろ。さっきまでここにいたのに。まさか帰ったわけじゃないよね」

秋彦 「帰る気があったらとっくに帰ってるよ。それ、つけるんだろ？」

浩樹 「あ……………うん」

秋彦と浩樹、バスルームにかかっていた暖簾をはず

し、くす玉を取り付ける。

秋彦 「あの女のどこがそんなに気にいったんだ？」

浩樹 「目」

秋彦 「目？」

浩樹 「綺麗なんだもん、ちひろの目」

秋彦 「そうか？」

浩樹 「秋彦も近くで見してみなよ。びっくりするぐらい綺麗だから」

秋彦 「興味ないね」

秋彦はキッチンを歩き来しながら、グラスやロウソク、こんぺいとうやチョコプレートを盛った皿などをテーブルに置く。  
浩樹も手伝う。

浩樹 「ほんとは好きでしょ、ちひろみたいなタイプ」

秋彦 「好きなわけないだろ？ あんな下品な女」

浩樹 「そうかなあ。結構合うと思うけどなあ」

秋彦 「どこがだよ」

浩樹 「ねえっ、見合いなんかやめてさ、ちひろと結婚したら？」

秋彦、鼻で笑ってキッチンに戻ろうとする。

浩樹 「秋彦」

秋彦 「ん？」

浩樹 「髪切ってよ」

秋彦 「え？」

浩樹、ハサミとクシを持ってくる。

秋彦 「こないだ切ったばっかりだろ？」

浩樹 「ここだけ変に伸びてきちゃったんだよ。はい、切って」

秋彦 「今？」

浩樹 「今」

秋彦 「しょうがねえな……」

秋彦、キッチンへ。  
背中を見送っている浩樹。

浩樹 「……………」

秋彦が髪の毛をいれる袋を持って出てきて、浩樹、あわててベッドの方へ。

秋彦 「どい」

浩樹 「こい。ピョン。ピョンはねてるでしょ？」

浩樹はベッドの下にしゃがみ、秋彦は浩樹をまたぐような格好でベッドに座り、髪を切りはじめる。  
間。

浩樹 「ねえ、初めて会った日のこと覚えてる？」

秋彦 「なんだよ、急に」

浩樹 「表参道の道端で、いきなり泣きだしたんだよね、秋彦」

秋彦 「覚えてるなよ、そんなこと」

浩樹 「嬉しかったよ。オレの絵にあんな反応してくれた人、初めてだし、びっくりしたけど嬉しかった。ただ、オレはチャップリン描いたつもりだったから、お父さんに似てるって言われたときはなんて言っていないかわかんなかったけどね」

秋彦 「(苦笑)」

浩樹 「ねえ、(と秋彦にもたれかかり)あの絵さ、もしお金出して買ったら、いくら出した？」

秋彦 「さあな。感情的になってたから、持ってる金、全部出したかもな」

浩樹 「げ。もったいないことした……」

秋彦 「おまえがタダでいって言ったんじゃないか。その代わりにメシおごっただろ？」

浩樹 「デニーズでね」

秋彦 「部屋にも泊めてやっただろ？」

浩樹 「雪降ってたからね。さすがに野宿はできないと思ったんだ。でもこの部屋来ても全然あつたかくなかったけど」

秋彦 「ああ、ヒーター全きかなかったんだよね。外、寒すぎ  
て」

浩樹 「そうそう。それで布団入っちゃったんだよね。一緒に」

秋彦 「……………」

浩樹 「修学旅行みたいだったって秋彦言ってたよね。それでオレも  
つい気が緩んじゃったんだ。多分、誰かに話したかった

んだな。HIVの検査で陽性だったことがわかって、それまで一緒に住んでいた男に出て行って言われて、はっきし言って死にたかったもんね」

秋彦「……………」

浩樹「そしたら秋彦のおながが鳴ったんだ。ぐっって」

秋彦「そうだったけ？」

浩樹「そうだよ。それでオレもバカらしくなって、二人でうどん作って食ったんだよ」

秋彦「しょうもないこと覚えてるな」

浩樹「忘れるわけないじゃん。オレは絶対忘れないよ」

秋彦「……………」

と、玄関のドアが開く音。

浩樹「あっ、帰ってきた！」

浩樹、立ち上がり、秋彦はハサミとクシをしまう。  
やがて、ちひろが入ってくる。

浩樹「もう、どこ行ってたんだよ。急にいなくなるから帰ったのかと思ったよ」

自分の服を着たちひろ、どこか青ざめている。

浩樹「どしたの？」

ちひろ「ううん、なんでもない！」

秋彦「……………じゃあ、はじめるか」

ちひろ「あっ、そうだね！ はじめよう！」

秋彦、キッチンへ。

ちひろ「これ何？」

浩樹「くす玉」

ちひろ「くす玉？ ヒロが作ったの？」

浩樹「うん」

ちひろ「すごい。さすがアーティストだね」

浩樹、ロウソクに火をつける。

ちひろ「わー、いいじゃんいいじゃん。クリスマスみたい」

浩樹 「こうするとともに雰囲気出るよ」

浩樹、部屋の明かりを落とす。

ちひろ 「いいねえ！」

浩樹 「いいでしょ？」

ちひろ 「いいいいい！ あっ、こんぺいとうだ！ なつかしい」

浩樹 「なつかしいでしょう」

ちひろ 「でもさ、こうした方がかわいくない？」

ちひろ、皿のこんぺいとうをグラスに入れる。

ちひろ 「ほら、かわいいー！」

浩樹 「かわいいー！」

ワインのボトルを持ってくる秋彦。

ちひろ 「見て見て！ かわいいでしょー！」

秋彦、グラスのこんぺいとうを皿に戻す。

ちひろ 「あっ、なにすんの!? せっかく飾ったのに！」

秋彦 「じゃあおまえだけこんぺいとう飲むんだな」

ちひろ 「……………」

ちひろ、秋彦にグラスを差し出す。

秋彦、浩樹とちひろのグラスにワインを注ぐ。

ちひろ 「よーし、今日は飲むぞー！」

浩樹も秋彦のグラスにワインを注ぐ。

浩樹 「じゃあちひろ、乾杯の音頭やってよ」

ちひろ 「OK！」

グラスを手に持つ三人。

ちひろ 「えー、本日は、お二人の同棲三周年パーティーにお招きいただき、誠にありがとうございます」

秋彦 「勝手に来たんだろ？」

浩樹 「シッ」

ちひろ 「なつかしいこの部屋に来たおかげで……あなたたち二人に会えたおかげで、私もようやく前に進めそうな気がしてきました。本当に、ありがとう」

秋彦・浩樹 「……………」

ちひろ 「それでは、お二人の同棲三周年をお祝いすると共に、これからの私たち三人の幸せを祈ってカンパニー！」

浩樹 「カンパニー！」

乾杯して飲む三人。

ちひろ、一気する。

ちひろ 「ハーツ……………」

浩樹 「あ……………」

秋彦 「ワイン一気するヤツ、初めて見た……………」

浩樹 「オレも……………」

ちひろ 「おいしいねえ、これ。どこのワイン？」

秋彦 「イタリア」

ちひろ 「イタリアかあ。おかわり」

浩樹 「あ、はいはい」

注ぐと、ちひろはまた一気。

秋彦・浩樹 「(ポカン)」

ちひろ 「ハーツ……………」

浩樹 「強いなだね……………」

秋彦 「いくらすると思ってる……………」

ちひろ 「イタリアワインは比較的安いって田崎真也が言ってたよ？」

秋彦 「それは高いんだよ！」

ちひろ 「おかわり」

浩樹 「はい」

注ぐと、ちひろはまた一気。

秋彦・浩樹 「(ポカン)」

ちひろ 「ところで、田崎真也と田崎真珠ってどういう関係？」

浩樹 「え？」

秋彦 「もう飲まずな！」

ちひろ 「聞いてくれる？」

秋彦 「なんだよ」

ちひろ 「私ね、決めたの」

秋彦 「なにを」

ちひろ 「明日、結婚相談所に行く」

浩樹 「えっ？」

ちひろ 「私ももう35だしさあ、出会いがないとか言ってる場合じゃないじゃない。出会いがなければ自分で作る！ それぐらいたくましくないと、女なんかやってけないもんね」

秋彦 「とにかく結婚したいわけね」

ちひろ 「結婚したいわけじゃないの。でも、寄り添って生きていける人がほしい。人生、一人じゃつまらないじゃない？  
あなたたち見て、そう思った」

秋彦・浩樹 「……………」

ちひろ 「だから、なんとしても寄り添える人見つけるの！ そのためだったらなんでもやるんだから」

浩樹 「ちひろだったらすぐ見つかるよ。オレがゲイじゃなかったらほっとかないもん」

ちひろ 「ヒロはほんとにやさしい子だねえ…………おばちゃん、もう泣けてくるよ…………」

浩樹 「おばちゃんとか言っちゃダメ！」

ちひろ 「え…………」

浩樹 「ちひろはいい女なんだから、もっと自分に自信持てよ。男はどこまでいっても自信の持てない生き物だからさ、自信持って真っ直ぐ生きてる女の人に憧れるんだ。大丈夫だよ、ちひろは。世界で一番いい女だよ」

ちひろ 「ヒロ！」

ちひろ、浩樹に抱きつく。

浩樹、よしよししてあげる。

ちひろ 「よーし！ 今日から私は世界で一番いい女だ！ 誰がな

んて言おうと世界で一番いい女だ！」

浩樹 「いいぞ！ その調子！」

秋彦 「(やれやれ)」

浩樹 「じゃあ食べよっか」

ちひろ 「食べよう！」

秋彦 「その前に、交換しないか？」

ちひろ 「なに？」

浩樹 「食べてからでいいじゃん。おなかすいたよ」

秋彦 「先にやりたいたんだ。いいだろ？」

浩樹 「……別に、いいけど」

ちひろ 「ねえ、なにになに？ なにするの？」

浩樹は別室へ。

秋彦、押し入れを開け、筒状に丸めた紙を取り出し  
てくる。

浩樹は布に包んだカンバスを持ってくる。

ちひろ 「ねえ、なにをするのよオ。教えてよオ」

秋彦 「教えない」

浩樹 「プレゼント交換するんだ」

ちひろ 「プレゼント交換!? もしかしてアンタたち、記念日のた  
びにプレゼント交換してんの!？」

浩樹 「うん」

ちひろ 「イヤァッ! やめてーっ! 恥ずかしーっ! でも、他  
人から見たら恥ずかしいこと、平気のできるのが恋人同  
士ってもんよね……。私も結婚相手の条件に書いてこ」

秋彦 「書くな」

ちひろ 「なんで？」

秋彦 「オレのはちょっと説明があるんだ」

テーブルに紙を広げる秋彦。

秋彦 「大分に建てる家の見取り図なんだ」

浩樹 「……………」

ちひろ 「すごい! 誰が書いたの？」

秋彦 「オレ」

ちひろ 「へーえ。よく書けてるじゃない。玄関どこ？」

秋彦 「ここ。ここが廊下で、キッチンにダイニングにリビング  
」

ちひろ 「ひろーい。これ何坪あるの？」

秋彦 「土地は全部で80坪」

ちひろ 「80坪!? そんな大きな家建てんの!？」

秋彦 「家自体は30坪で、あとは畑にしようと思ってるんだ」

ちひろ 「畑？」

秋彦 「この辺りは土地余ってて、値段も安いから、まわりにあ  
る家もみんな自分ちで野菜作ったり、果物作ったりして  
てね、ゆくゆくは自給自足も夢じゃない」

ちひろ 「自給自足かあ。いいなあ。ねえねえ、私の部屋も作らない？」

秋彦 「なんでだよ」

ちひろ 「住まないから。たまに行くだけ」

秋彦 「じゃあ寝袋持って来い。リビングで寝かしてやるよ」

ちひろ 「ケチ」

秋彦 「ここは和室で、おふくろの部屋。ここがトイレで、こっちが風呂。トイレは二階にもあって、寝室とルーフバルコニー、あとオレの部屋と……ヒロの部屋」

浩樹 「……………」

ちひろ 「え……じゃあ、お母さんとヒロの三人で住むの？」

秋彦 「うん……」

ちひろ 「だったら最初からそう言ってよ！」

と、秋彦の背中を叩くちひろ。

ちひろ 「あなたただけ田舎に帰るのかと思って心配しちゃったじゃない！」

秋彦 「今日言おうと思って内緒にしてたんだよ」

ちひろ 「もしかして、邪魔しちゃった？」

秋彦 「いや……」

あらたまって、浩樹に言う。

秋彦 「ヒロ……実は、もうすぐここにおふくろが来るんだ。明日、新宿コマで島倉千代子のコンサート見るから泊めてくれて今朝いきなり電話があってさ……来たら、会ってくれないか。おまえのことおふくろに、ちゃんと紹介したいんだ」

浩樹 「……………」

ちひろ 「このこのオ、プロポーズじゃねえか、そりゃ」

秋彦 「うるさいな……」

ちひろ 「じゃあやっぱり私の部屋も作ってよ」

秋彦 「やだね」

ちひろ、秋彦の耳に息を吹きかける。

秋彦 「ギャハハハハハハ！」

ちひろ 「ほんとだ！ 笑った！」

秋彦 「何すんだ、おまえは！」

ちひろ 「ねえ、ヒロのプレゼントはなんなの？」  
浩樹 「ああ……」

浩樹、布に包んだキャンバスを秋彦に渡す。  
キャンバスに描かれていたのは、秋彦の肖像画。

秋彦 「……………」

ちひろ 「あ……………！ すごーい！ そっくりー！ 気持ち悪いぐら  
い似てるーっ！ 似てるよねえ！」

秋彦 「あ、ああ……………」

ちひろ 「もう、よかったじゃない！ 昼間ね、オレの絵だけは描  
いてくれないって拗ねてたんだよ？ よかったねえ。描  
いてもらえて。あっ、ねえ！ 大分の家に飾れば？ 玄  
関入ったとこにバーンで。来た人びっくりして帰っちゃ  
ったりしてね（笑）」

秋彦・浩樹 「……………」

何やら戸惑っている秋彦。

浩樹も目を合わせようとしない。

ちひろ 「ちょっとどうしたのよ、二人とも。ひよっとして、照れ  
ちゃってんの？ あのね、言っとくけど、プレゼント交  
換する方がよっぽど恥ずかしいよ？ ププププ」

秋彦 「おまえ……………過去の人しか描かないんじゃないかったのか？  
」

ちひろ 「え……………」

浩樹 「……………」

秋彦 「だからオレの絵は描いてもらえない。もし描いたらそれ  
は、おまえにとってオレが過去の人になるときだろうっ  
て勝手に思ってた……………。そうじゃなかったのか？」

浩樹 「そうだよ。だから秋彦を描いたんだよ」

秋彦 「！」

浩樹、くす玉を割る。

中から銀の折り紙がどっさり落ちてきて、『お別れ  
記念日』の垂れ幕が垂れる。

秋彦とちひろは垂れ幕に呆然。

秋彦 「なんだよ、これ……………」

ちひろ 「お別れ記念日って……………冗談でしょ、ヒロ。冗談だよね？

「もう、やめない？」

浩樹 「なにをだよ……」

秋彦 「いいんだよ、もう。そんなに責任感じなくていいよ。オレさ、秋彦に助けてもらおうなんてこれっぽっちも思っ  
てないから」

浩樹 「何言ってるんだよおまえ……」

秋彦 「一度拾った猫を捨てるのは良心が痛むよね。その猫が病  
気だったら尚更だよ。あとは猫が自分から出て行くのを  
待つしかない。だからオレ、出てくよ」

ちひろ 「ちよっと待ってよ。なんで出てくの？ 今、一緒に大分  
に行こうって言ったばかりじゃない」

浩樹 「オレは行かないよ」

ちひろ 「ヒロ……」

浩樹 「なんでオレが大分なんかに行かなきゃいけないんだよ。  
オレ、ホモだよ？ 田舎で暮らすホモがみんな都会に出  
てくるのに、なんでわざわざ田舎行って暮らさなきゃい  
けないんだよ。冗談じゃないよ（笑）」

秋彦 「……」

ちひろ 「何言ってるのよ。田舎って言っても、二人で一緒に住む  
んだから……」

浩樹 「秋彦はホモじゃないんだ」

ちひろ 「え……？」

浩樹 「ホモのふりしてるけど、ほんとはノンケ。ただの男だよ  
」

秋彦 「……」

ちひろ、秋彦を見る。

浩樹 「オレたち、セックスしたことないんだ。オレがエイズだ  
からじゃないよ？ エイズでもセーフセックスしてるヤ  
ツはいくらでもいるからね。オレが手を出さなかったの  
は、秋彦がホモじゃなかったからだよ」

秋彦 「だったらおまえと暮らさないよ」

浩樹 「あのときは必要だったんだよ、オレが。オレが、じゃな  
いな。誰かが必要だったんだ。それがたまたまオレだっ  
た。たまたまホモのオレだったんだ。だからもう無理す  
ることないよ」

秋彦 「オレは無理なんかしてない」  
浩樹 「してるよ」

秋彦 「してない！」

浩樹 「してんだよ！ じゃあなんでホモでもないのに、ホモと暮らしてんだよ！ なんて親でもないのに、生活の面倒まで見てんだよ！ それはオレがかわいそうだからだろ！? エイズだからだろ！?」

秋彦 「……そんな風に思ってたのか……」

浩樹 「はっきりに言ってももうんざりだよ。いつもオレの顔色見て、いつもオレに気イ遣って、いつもオレの言いなりになって、秋彦は自分がどうしたいかってことより、オレがどうしたいかってことをいつも先に考えてんだよ。そういう秋彦見るの、もうんざりなんだよ」

秋彦 「……」

浩樹 「田舎に帰りたい人なら一人で帰れよ。秋彦はオレに気イ遣ってるつもりかもしれないけど、オレはダシにされていい迷惑だよ。同情されんのは真っ平なんだよ」

秋彦 「同情されなくなったら、エイズだからなんて言うな！」

浩樹 「……」

秋彦 「なんの関係があるんだよ。おまえの体のことと、オレたちが今後どうするかってことは、何の関係もないだろ！」

浩樹 「関係ない？ 秋彦……ほんとにそう思ってるの？」

秋彦 「ああ、思ってるよ」

浩樹、突然笑いだす。

浩樹 「(ちひろに) オレさ、秋彦に面倒見てもらってたんだ。学校の授業料だけじゃなくて、生活費も全部秋彦に払ってもらってたの」

秋彦 「今、そんな話……」

浩樹 「男女の関係で言うとおモだよ。カンペキにヒモ。ホモのヒモ。最悪でしょ？ (笑)」

ちひろ 「……」

秋彦 「……」

浩樹 「別れても秋彦には一生足向けて寝られないよ。ほんと、アタマあがんない。でも悪いから、オレもバイトはしてるんだ」

秋彦 「え……?」

浩樹 「ウリセンって言ってさ」

秋彦 「!？」

ちひろ 「ウリセン？」

浩樹 「売り専門で意味。金くれる人とやって金もらうの。女子高生の援交と同じだよ」

秋彦 「ヒロ……おまえ……」

浩樹 「すごいんだ。普通に結婚してリーマンやってるオヤジがさ、尻穴なめさせてくれとか精子飲ませてくれて泣いて頼むんだ。もう気持ち悪くてさあ」

浩樹に掴みかかる秋彦。

ちひろ 「ちよっと！」

秋彦 「ほんとにやってんのか、そんなこと！ ほんとにやってんのか！ どうなんだ！ 答えろ！ 答えろよ！」

ちひろ 「ちよっとやめて！ やめてよ！」

浩樹、ゲラゲラ笑いだす。

浩樹 「やるわけないだろ、そんなこと（笑）。やるわけないじゃん。ねえ、今の顔見た？ あー、おかしい（笑）」

秋彦、浩樹を突き飛ばすようにして放す。

浩樹、ひとしきり笑ってから、真顔に戻る。

浩樹 「でも、これからどうなるかわからない……」

秋彦 「……………」

浩樹 「自分でもわからないんだ。でも、時々じっとしてられなくなつて……意味なくハッテン場とか行って、暗くて、じめじめした布団で抱き合ってる男たち見て、最低なところにオレはいるんだ、オレはコイツらと一緒になんだって……嫌な気持ちになるけど、同時に冷静になる。このままじゃいけない、あの部屋を出て行かなきゃいけないってね」

秋彦 「……………」

浩樹 「でも、ここに帰ってくるとまた決心が鈍るんだ。さっきまで出て行くつもりでいたのに、あと一週間、あとひと月って、結局ずるずる……気がついたら三年だよ」

秋彦 「甘えるのもいい加減にしろ！」

浩樹 「だから出てくよ！」

秋彦 「そうじゃないだろ!? おまえは何にもわかってないよ。三年も一緒にいて、オレの何を見てたんだよ。ほんとに

おまえが重荷だったらとつくにダメになってるよ。そうじゃないから暮らしてこれたんだろ！ ホモだとか病気だとか、そういうことで繋がってるんじゃないから今までやってこれたんだろ！」

浩樹  
秋彦

「一緒に大分に行こう。近くにいい病院があるんだ。小さな町医者だけど、早くからHIVの治療に取り組んでた病院で、医者はオレの高校時代の同級生だ。おまえのことももう話してある。なにも心配することなんかないんだ。おまえは安心して治療に専念すればいいんだ」

浩樹  
秋彦

「オレは行かない」  
「ヒロ」

「無理だよ、一緒に暮らすなんて」

秋彦

「なんで無理なんだ！」

浩樹

「嫌なんだよ！」

秋彦

「なにが！」

浩樹

「秋彦とは一緒にいたくないんだよ……」

秋彦

「なんでだよ……なんでオレじゃダメなんだよ。オレがホモじゃないからか。そうなのか？」

浩樹

「……」

秋彦、浩樹の腕を掴んでベッドに突き飛ばす。

浩樹

「なにすんだよ……」

秋彦

「おまえがどう思おうと勝手だけど、オレはホモじゃないなんて思っていない！ でも肉体関係がなきゃホモじゃないって言うんだったらやってやるよ！ それでいいんだな!? そしたら大分に来るんだな!？」

秋彦、浩樹に覆いかぶさる。

浩樹

「行かないって言ってるだろ！」

秋彦

「じゃあどうすりゃいいんだ！」

浩樹

「好きなんだよ！ 好きだから嫌なんだよ！」

秋彦

「……」

浩樹

「嫌なんだよ……オレのために秋彦に無理させるのは……好きな人の……好きな人の自由だけは奪いたくないんだよ……」

秋彦

「……」

不意に、二人に向かってこんぺいとうを投げるちひろ。

浩樹・秋彦「!？」

秋彦「おい……」

ちひろ、また投げる。

秋彦「何やってんだ……」

ちひろ、バンバンこんぺいとうを投げ続ける。

秋彦「おい、やめろよ！ おい！ いい加減にしろ！」

ちひろ「バカじゃないの？ アンタたちバカよ……二人とも大バカよ！ ホモがどうしたのよ……エイズがどうしたのよ！ いいじゃない！ それでも一緒にいたいって言うってくれる人がいるんだから！ なんて素直に喜ばないのよ！ なんて抱き合って喜ばないのよ！ 私なんかどうすんのよ……一人だよ……？ 私が死んだって誰も困る人いないんだよ……？ 私がいなくて淋しいって思ってくれる人なんか誰もいないんだよ……？」

秋彦・浩樹「……」

と、遠くから救急車の音が近づいてきて、すぐ近くで止まる。

ちひろ「!？」

サイレンの赤い光が窓から差し込むほど近く。

ちひろ、青ざめて、ベランダへ走る。

秋彦が追い、浩樹もわけがわからなまま追う。

ベランダから教授の家を見て、固まっているちひろ。

浩樹「教授んちの前だ」

ちひろ「どうしよう……」

浩樹「え？」

ちひろ「私……大変なことしちゃった……」

秋彦「なにしたんだ」

ちひろ「どうしよう……私のせいだ……私のせい……」

秋彦 「なにしたんだ。なにしたんだ！」

ちひろ 「手紙……」

秋彦 「手紙？」

ちひろ 「手紙、書いたの、奥さんに……あなたのご主人には愛人がいましたって……あなたの信じてるご主人はそういう人だって……」

浩樹 「じゃあちひろ……教授と……？」

ちひろ 「嘘じゃなかったのよ！ほんとに病気だったのよ！私があんな手紙出したから……私のせいよ……私の……！」

秋彦 「落ち着けよ！」

浩樹 「オレ、見てくる！」

浩樹、走り出て行く。

ちひろ 「私……あなたたちにも嫉妬してたの……。あなたたちの方がずっと深刻な問題抱えてるってわかってても、それでも自分の方がかわいそうだと思ったの……」

秋彦 「いいんだよ、それで」

ちひろ 「何がいいのよ！最低じゃない！……いつから私、こんな人間になっちゃったんだろ……どんなに不幸でも、人の幸せをねたむような人間にだけはなりたくないって思ってたのに……いつからこんな嫌な人間になっちゃったんだろ……」

秋彦 「……オレは、アンタじゃないから、アンタの抱えてる問題がどれだけ深刻かは、正直言ってわからない。ヒロのことにしたってそうだ。アイツの抱えてるものは、結局アイツにしかわからない。でもオレは、アイツの方が深刻で、アンタの方は深刻じゃないなんて思ってるよ。ヒロだってきつと、そう思ってるよ」

ちひろ 「……」

秋彦 「アンタは、嫌な人間なんかじゃない。幸せになりたいだけだ。幸せになりたい人間が、人の幸せ見てうらやむのは当たり前のことだよ」

ちひろ 「……」

秋彦 「遅いなアイツ、何やってんだよ……。あつ、担架出てきた。あれ？誰も乗ってないぞ」

ちひろ 「え……」

秋彦 「見ろよ。誰も乗せないで帰って行く」

ちひろ 「……死んだの？」

秋彦 「バカ！ だったら病院に運ぶよ。あっ、ヒロ！ バカ、アイツ……」

ちひろ 「なに……？」

秋彦 「話してる。教授と……」

ちひろ 「……」

秋彦 「見ないのか？」

ちひろ 「……」

目を背けていたちひろ、ゆっくり振り返り、おそろおそろ教授の家を見る。

久しぶりに見る、かつて愛した人の顔。

ちひろ 「……」

秋彦 「やっぱり似てるな」

ちひろ 「え……？」

秋彦 「篠沢教授」

ちひろ 「(にらむ)」

秋彦 「(苦笑)」

ちひろもようやくフツと笑う。

秋彦 「あっ、家入った！ ヒロ、今だ！ ポストポスト！ そ

っちじゃないよ！ 取れないだろ、そっからじゃ！ そ

う、そっちだよ！」

ちひろ 「あっ、それ！ それ、私の手紙！」

秋彦 「バカ！ 手振るな！ 早く！ 早く戻って来い！」

ひとまずホツとする秋彦とちひろ。

秋彦 「……そろそろいいか？」

ちひろ 「え？」

秋彦 「手」

興奮のあまり、秋彦の腕をがっしり掴んでいたちひろ。

ちひろ 「あ……ごめん」

手を離すちひろ。

秋彦 「うー寒……行くぞ」

秋彦とちひろ、部屋へ。

秋彦、ポリポリと背中をかいている。

ちひろ 「ゲイじゃないって、ほんと？」

秋彦 「……………」

ちひろ 「じゃあ、どうしてじんましんが出るの？ 単に女が嫌い

なの？」

秋彦 「男に触られても出るんだ」

ちひろ 「え……………」

秋彦 「でも、なぜか浩樹は平気だった。同じベッドで寝ても、

なんともなかったんだ」

ちひろ 「そう……………」

ちひろ、ふと、電話のコードが抜かれたままなのに  
気づく。

ちひろ 「ねえ、これ！」

秋彦 「ああっ！ 忘れてた！」

ちひろ 「もう何やってんのよ！ お母さん、とっくに着いてるよ  
！」

あわててコードをつなぐ秋彦。  
と、いきなり電話が鳴る。

秋彦・ちひろ 「うわあっ」

秋彦 「(出て)もしもし、」めん！ 今どこ!? ホテル？ な  
んでホテルなんか…………うん、うん、そっか(苦笑)」

気にしているちひろに、

秋彦 「新幹線できなりに座った人と一緒にホテルに泊まるって

ちひろ 「(へーえ)」

秋彦 「え？ ヒロじゃないよ。ヒロは今…………(ハツとして)ち

よっと待って。なんでヒロのこと知ってたんだよ…………」

ちひろ 「……………」

秋彦 「いつから…………そう…………。ああ、元気だよ。今ちよつとい  
ないけど…………言っとく。ああ。じゃあ…………」

受話器を置く秋彦。

ちひろ 「どうしたの？」

秋彦 「文通してたって……」

ちひろ 「え？」

秋彦 「去年の夏、おふくろ、腰悪くして、ちょっと入院したんだ。そのときヒロから手紙が来て、以来ずっとやりとりしてたって……」

ちひろ 「……」

秋彦 「なんで気がつかなかったんだ……半年もやりとりしてて、なんで……」

秋彦、ハッと思い出して別室へ走る。

ファンレターの入った大きな封筒を持ってきて、テーブルに中身を出す。

中から、一通の手紙を見つける秋彦。

秋彦 「あ……」

秋彦、中の手紙を出して読む。

秋彦 「……」

読み終わったものから、ちひろも読む。

ちひろ 「ヒロくん、お元気ですか？ 毎日寒いですが、風邪などひいてませんか？ 島倉千代子のコンサートのチケット、昨日届きました。本当にありがとう。もう行けないものとあきらめていたので、本当にうれいす。それから、お見合いの話は断りました。思えば、お父さんが亡くなってから、私は秋彦に甘えっぱなしでした。家のことも、今回のお見合いのことも、私に気を遣ったこととでしよう。もう私のために無理をすることはないと、ヒロくんから秋彦に言ってやってください。あの子にはあの子の人生があると、最近ようやく思えるようになってたのです。それもこれも、東京でがんばっているあの子の様子を伝えてくれたヒロくんのおかげだと思っています。どうかこれからも秋彦のこと、よろしく願います。それでは日曜日、お会いできることを楽しみにして

います。瑠璃子」

秋彦 「バカだな、オレは……アンタの言う通りだ……今日おふくろが来るって言えばすむことだったんだ……それを、変に隠したりしたから……」

くす玉から垂れている『お別れ記念日』の垂れ幕。

秋彦 「そりゃ別れるって言うよな……当然だよな……」

ちひろ 「ヒロは、別れるつもりなかなかったんじゃない？」

秋彦 「え……？」

ちひろ 「だって、本気で別れるつもりだったら、黙って出て行かない？ お母さんとも文通なんかしないと。別れようと思ったけどダメだったのよ。それぐらいヒロは、あなたのことが好きなのよ」

秋彦 「……………」

ちひろ、手紙を封筒にしまう。

秋彦は、浩樹がくれた絵に目をやる。

秋彦 「オレの親父、ゲイだったんだ」

ちひろ 「……………」

秋彦 「それがわかったとき、オレ、ひどいこと言って……その直後にあっけなく死なれたから後味悪くてさ……。でもヒロに言われたんだ。オレと同じ立場なら自分も同じよ。うなこと言っただろうし、親父もきつとわかってるって……それでオレ、やっと楽になれたんだ……」

ちひろ、浩樹が戻ってきていることに気づく。

秋彦 「オレは、いわゆるゲイじゃないかもしれない。でもオレはアイツが好きだ。アイツだけは、失いたくないんだ」

ちひろ 「(浩樹に) だって」

秋彦 「え？」

振り返る秋彦。

秋彦 「あ……………」

浩樹 「……………」

浩樹、ちひろに、星型に折られた銀の折り紙を差し出す。

浩樹 「まだ読んでなかったよ」  
ちひろ 「ありがとう」

秋彦 「それ……手裏剣？」

ちひろ 「星……」

秋彦 「(ああ……)でもそれ、もしポスト開けてても、読まな  
かったんじゃないか？」

ちひろ 「(苦笑)」

浩樹 「奥さんが発作起こしたんだって」

ちひろ 「……………」

浩樹 「軽い発作だったらしいんだけどね、奥さん、心臓が悪く  
て伊豆の病院に入院してて、一時退院してるところだから  
、念のために救急車呼んだって」

秋彦 「じゃあ、ほんとに病気だったんだ……」

ちひろ 「……………」

秋彦 「よかったじゃないか。嘘つくような人じゃなくて」

間。

浩樹 「嘘だよ」

ちひろ 「え？」

浩樹 「ほんとはね、奥さんが焼きいも食べすぎて、おなか痛く  
なったんだ」

秋彦 「あ？」

ちひろ 「……………」

浩樹 「三本買ってたって言っただろ？ てっきり教授と子供  
と分けるのかと思ってたらさ、三本全部、奥さんがこっ  
そり一人で食べちゃったんだ。そしたら晩ごはん食べて  
る途中に奥さんがおなか痛いって言いだしてさ、それで  
あわてて救急車呼んだんだ」

秋彦 「……………」

ちひろ 「……………」

浩樹 「だって奥さん、焼きいも買いに来るとき、トラックまで  
走ってきたんだよ？ 心臓が悪くて入院してる人があんな  
な全速力で走るわけじゃないじゃん。病気なんて嘘だよ。入  
院してるっていうのも嘘だよ」

ちひろ 「……………」

秋彦 「オレも見たな……」

ちひろ 「え？」

秋彦 「奥さんが全速力で走ってるとこ。朝、ゴミのトラック追  
いかけて走ってたよ。ゴミの袋、両手に抱えて全速力で

浩樹 「ゴミの袋だったらまだいいよ。オレは子供抱いて走つてるとこ見たよ？ 幼稚園バスに乗り遅れて、子供、片手に抱えて走ってた。全速力で」

秋彦 「子供だったらまだいいよ。オレなんか自転車抱えて走つてるとこ見たぞ」

浩樹 「自転車だったらまだいいよ。オレなんかバイク抱えて走つてるとこ見たもんね」

ちひろ 「バイクだったらまだいいわよ」

秋彦と浩樹、ちひろを見る。

ちひろ 「私なんか旦那抱えて走つてるとこ見たもんね。うちに来てた旦那、片手で抱えて帰って行ったの」

間。

浩樹 「それは嘘だよ」

ちひろ 「ほんとよ」

浩樹 「嘘だよ。だって教授の体重、何キロあると思つてんの？」

秋彦 「太ってるもんなあ、教授。まあ100キロはあるよな」

浩樹 「いくらなんでも片手で100キロは無理でしょう」

秋彦 「無理だなあ」

浩樹 「ちよつと言いきすぎでしょう」

秋彦 「言いきすぎだなあ」

ちひろ 「なによもう……」

三人、笑う。

秋彦 「なんで黙ってた、おふくろのこと」

浩樹 「自分だって絵のこと隠してただろ？」

ちひろ 「おあいこつてことでいいじゃない。もう隠してることないんですよ？」

浩樹 「ないよ」

ちひろ 「(秋彦に) ないよね？」

秋彦 「……実は、ある」

浩樹 「え？」

秋彦 「実は……また店が変わった」

浩樹 「は？」

秋彦 「荻窪店から原宿店だって」

浩樹 「なんだよ、それ！」

秋彦 「(苦笑)」

ちひろ、くす玉の下に落ちていた銀の折り紙を掴み、  
秋彦に投げる。

秋彦 「あっ……なにすんだよ……」

浩樹、瓶ごと持ってきて、いっぱい投げる。

秋彦 「あっ……このヤロウ……！」

秋彦も投げる。

三人、無邪気に折り紙の投げ合い。

秋彦 「大分来いよな！」

浩樹 「行くよ！ 卒業旅行、大分にする！」

秋彦 「そういうことじゃないだろ？」

浩樹 「ねえっ、ちひろも一緒に行こうよ」

ふと見ると、ちひろは窓の外をじっと見ていた。

秋彦と浩樹、顔を見合せてちひろに並ぶ。

そして、それぞれ、瓶から折り紙をひと掴み。

浩樹 「オレはねえ、星が降っても別れない！」

秋彦 「うそつけ！」

空に向かって折り紙を投げる三人。

窓の外、教授の家の庭に降る、銀の折り紙でできた  
小さな星たち。

寄り添って見ている三人。

幕。